

水戸市大串遺跡

市道常澄8-1495号線埋蔵文化財発掘調査報告書

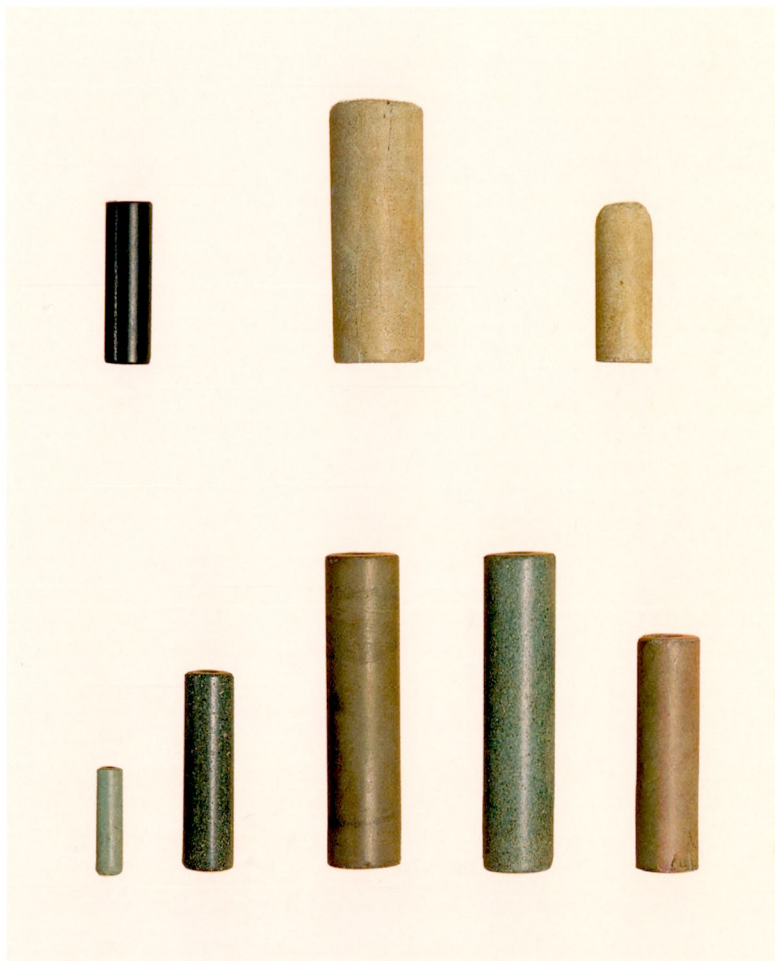
茨城県水戸市

平成六年一〇月

水戸市大串遺跡

題 字 古橋貞夫（水戸市教育委員会教育長）

原色図版
大串遺跡出土管玉



大串遺跡出土管玉（第二・三次調査）

序

長い歴史と伝統に培われた水戸市には、貴重な歴史的遺産が数多く残されており、そのひとつである埋蔵文化財については、現在周知されている遺跡だけでも市内に257カ所を数えます。

この埋蔵文化財は、一度破壊されると二度と現状に戻すことのできない掛替のないもので、将来の文化創造の基礎となることから、私たちが大切に保存しながら後世へ伝えていかなければなりません。

本市では、その意義や重要性を踏まえ、文化財保護法並びに関係法令に基づいた埋蔵文化財の保護保存に努力しているところです。

このたびは、大串貝塚ふれあい公園に隣接する市道8-1495号線改良工事予定地内に大串遺跡が存在するため、文化財保護の観点から事前に十分に協議を重ねた結果、記録のうえで保存の措置を講ずることとし、発掘調査を実施するに至ったものです。

本調査は、大串遺跡の第一次調査（昭和62年度、常澄中学校体育館新築工事時）および第二次調査（昭和63年度、大串貝塚ふれあい公園整備時）区域に隣接する地域の調査であり、調査の結果、古墳時代前期から後期に至る竪穴式住居址が11軒確認され、さらに大小8個の管玉や高環形土器等の遺物も出土しました。

また、第一次・第二次の調査結果と総合した遺構分布状況から、当該地域をはじめ、周辺地域には古墳時代を中心とする多くの集落群が形成されていたことが明確になり、当時の生活様式の一端を知るうえで大変貴重な資料を得ることができました。

本書が、郷土の歴史解明はもとより、貴重な文化財に対する認識と学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いに存じます。

終わりに、本調査並びに本書の刊行にあたり御尽力いただきました調査主任井上義安先生をはじめ、調査関係者の皆様、御指導・御助言をいただきました茨城県教育庁文化課並びに水戸教育事務所生涯学習課の諸先生方に心から深甚なる感謝を申し上げる次第です。

平成6年10月

水戸市教育委員会

教育長 古橋 貞夫

例 言

- 1 大串遺跡は、茨城県水戸市塩崎町に所在する。
- 2 発掘調査は、市道常澄8-1495号線の改良工事に伴うもので、「大串遺跡発掘調査委託契約書」に基づいて実施した。
- 3 発掘調査は、平成6年2月23日に開始し、同年3月28日に終了した。
- 4 発掘調査の面積は約1,500㎡である。
- 5 発掘調査は、水戸市（市長 岡田 広）の委託により、井上義安（日本考古学協会会員）が担当者、鈴木浩子が補佐員となって実施した。
- 6 本書に掲載した写真は、井上義安、鈴木浩子、内藤 彰が撮影したものである。
- 7 出土品の整理と図面の作成は、発掘終了後、大串貝塚ふれあい公園L・E・Cセンターにおいて行った。
- 8 出土遺物は、水戸市教育委員会の責任で保管されている。

凡 例

- 1 住居地の番号は、同一遺跡における資料の取り扱いに混乱が生じやすいので、第二次発掘調査（昭和63～平成元年）に後続する番号とし、今回発見した11軒の住居地については、第六号住居地から番号を付した。
- 2 接合資料は、出土地点番号（遺物番号と同一）、表裏関係（表△・裏▽・立ち▷）、床上レベル（計測単位cm）の順で記載した。
- 3 住居地内出土遺物の種類は次の記号で区別した。
土師器●・須恵器○・紡錘車⊙・球状土製品⊕・管玉口・鉄製品☒・石製品△・自然石▲・縄文土器○
- 4 土器の断面を墨で黒く塗りつぶしたものは須恵器をあらわす。

本文目次

原色図版 大串遺跡出土管玉

序

水戸市教育委員会 教育長 古橋貞夫

例 言

挿図目次

図版目次

第一章 はじめに	1
第二章 遺跡の位置と環境	2
第三章 発掘調査の概要	4
第四章 古墳時代前期の住居址と出土遺物	7
1 第七号住居址	7
2 第八号住居址	11
3 第九号住居址	14
4 第一〇号住居址	20
5 第一一号住居址	21
6 第一二号住居址	26
7 第一四号住居址	28
8 第一五号住居址	31
9 第一六号住居址	33
第五章 歴史時代の住居址と出土遺物	38
1 第六号住居址	38
2 第一三号住居址	41
第六章 まとめ	47
謝 辞	48

発掘調査従事者

報告書作成従事者・協力者

挿 図 目 次

第 一 図	遺跡付近地形図（○大串遺跡）	3
第 二 図	発掘調査区域図	5
第 三 図	遺構分布図（第二・三次調査を含む）	6
第 四 図	第七号住居址実測図	8
第 五 図	第七号住居址出土遺物実測図	9・10
第 六 図	第八号住居址実測図	12
第 七 図	第八号住居址出土遺物実測図	13
第 八 図	第九号住居址実測図	15
第 九 図	第九号住居址出土遺物実測図(1)	17
第一〇図	第九号住居址出土遺物実測図(2)	18
第一一図	第九号住居址出土遺物実測図(3)	19
第一二図	第一〇号住居址・出土遺物実測図	21
第一三図	第一一号住居址実測図	22
第一四図	第一一号住居址接合関係図	23
第一五図	第一一号住居址出土遺物実測図(1)	24
第一六図	第一一号住居址出土遺物実測図(2)	25
第一七図	第一二号住居址・出土遺物実測図	27
第一八図	第一四号住居址実測図	29
第一九図	第一四号住居址出土遺物実測図	30
第二〇図	第一五号住居址実測図	31
第二一図	第一五号住居址出土遺物実測図	32
第二二図	第一六号住居址実測図	34
第二三図	第一六号住居址出土遺物実測図	35・36
第二四図	第六号住居址実測図	39
第二五図	第六号住居址出土遺物実測図	40
第二六図	第一三号住居址実測図	42
第二七図	第一三号住居址カマド・柱穴実測図	43
第二八図	第一三号住居址出土遺物実測図	45・46

図版目次

- 図版第一 1 遺跡の遠景〈東から〉
2 遺跡の遠景〈南から〉
- 図版第二 1 遺跡の近景〈南から〉
2 遺構の出土状態〈南から〉
- 図版第三 1 発掘調査の状況（第一一号住居址）〈南から〉
2 発掘調査の状況（第一二号住居址）〈北から〉
- 図版第四 1 第七号住居址遺物出土状態〈東から〉
2 第七号住居址遺物出土状態〈北から〉
- 図版第五 1 第八号住居址全景・柱穴断面〈西から〉
2 第九号住居址遺物出土状態〈北から〉
- 図版第六 1 第九号住居址遺物出土状態〈西から〉
2 第九号住居址遺物出土状態〈北から〉
- 図版第七 1 第一〇号住居址全景〈東から〉
2 第一一号住居址遺物出土状態〈南から〉
- 図版第八 1 第一一号住居址炉址〈確認時〉
2 第一一号住居址遺物出土状態〈東から〉
- 図版第九 1 第一一号住居址遺物出土状態〈土器〉
2 第一一号住居址遺物出土状態〈管玉・球状土製品〉
- 図版第一〇 1 第一四号住居址全景〈南から〉
- 図版第一一 1 第一四号住居址遺物出土状態〈西から〉
2 第一四号住居址遺物出土状態〈土器・管玉〉
- 図版第一二 1 第一六号住居址遺物出土状態〈北から〉
2 第一六号住居址炉址断面
- 図版第一三 1 第一六号住居址遺物出土状態〈土器〉
2 第一六号住居址遺物出土状態〈土器〉
- 図版第一四 1 第六号住居址遺物出土状態〈北から〉
2 第六号住居址カマド・遺物出土状態〈鉄鎌〉
- 図版第一五 1 第一三号住居址遺物出土状態〈東から〉
2 第一三号住居址遺物出土状態〈土器〉
- 図版第一六 1 第一三号住居址柱穴（P₁）断面

2 第一三号住居址柱穴 (P₂) 断面

函版第一七	第六·七·九号住居址出土遺物
函版第一八	第九号住居址出土遺物
函版第一九	第一一号住居址出土遺物
函版第二〇	第一三号住居址出土遺物
函版第二一	第一四·一五·一六号住居址出土遺物
函版第二二	第六·七·一六号住居址出土遺物
函版第二三	第八·一一·一六号住居址出土遺物

第一章 はじめに

常澄村は、平成4年3月3日に水戸市に合併し、『常陸国風土記』大櫛岡の巨人と貝塚の説話で著名な大串貝塚の所在する地は、水戸市塩崎町、大串町という新町名に変更された。

これより先に常澄村は、昭和63年3月に第三次総合計画を策定した。その一つに、大串貝塚周辺一帯を（仮称）「大串貝塚周辺におけるふれあいのまちづくり事業」を計画し、歴史公園として整備することを決定した。

この計画の概要を教育委員会は、「遺跡の保護保全はもとより広い意味での整備を図るために、出土品等の保管・展示、また当地に言い伝わる巨人伝説等歴史的背景の紹介、コミュニティ形式の場としての機能整備等を目的とする歴史資料館（まちづくりセンター）の建設、児童・青少年には健全な運動やサークル活動の場を、老人には憩いの場を与え、スポーツ・レクリエーション等の振興により人間性を培い、村民にうるおいと豊かさを与えることを目的とし、さらに災害時における地域住民の避難場所としての防災機能も備えることを図るものである。」と説明している。こうした一連の計画は、まことに時宜をえたもので、その後着実に進展して事業が開始されたのである。

本事業を推進する計画予定地内は、大串貝塚の所在する西側の台地が該当し、ここは周知の遺跡でもある。したがって、これまでに施設建設予定地内を3回において確認調査を実施してきた。第一次調査（昭和62年）は、常澄中学校体育館建設に伴う確認調査で、古墳時代前期4世紀後半～5世紀初頭の円形周溝墓（直径約20m、周溝幅2m前後、深さ45～60cm）を1基発掘した。第二次調査（昭和63年～平成元年）は、（仮称）大串貝塚周辺におけるふれあいのまちづくり（スポーツ広場、センター広場、太古広場）に伴う確認調査である。本調査は3地区に調査区が設定され、第二調査区のセンター広場においては、古墳時代前期の住居址5軒が検出され、第三調査区の太古広場では縄文時代後期の土壙、古墳の周溝の一部が調査され、多くの有意義な資料を獲得した。第三次調査（平成2年）は、貝層断面観覧施設建設にあたり、貝層の範囲確認のための調査であって、昭和60年に発掘したB地点（担当者川崎純徳）の一角である。ここには良好な貝層の堆積がみられず、僅かにブロック状の小貝層を3地点で発見しただけであった。したがって、本調査区への貝層断面観覧施設建設は断念せざるをえなくなり、北側傾斜地のC地点北西側に変更された。

大串貝塚ふれあい公園は、当初の予想に反して入場者が確実に漸増している。このたび公園西側の市道常澄8-1495号線の改良工事を行うことになった。このために確認調査を実施したのが今次の発掘で、後述するような成果を収めることができた。

第二章 遺跡の位置と環境

国指定史跡の大串貝塚は、茨城県を代表する著名な縄文時代前期の遺跡である。この貝塚の所在する台地上、常澄中学校の西南側一帯には、これまでに縄文時代後期の土壌、弥生時代後期の遺物、さらには古墳、円形周溝墓、竪穴住居址などが発見されている。こうした各種遺構のある台地上の遺跡は、一般に貝塚と区別して大串遺跡（塩崎原遺跡を含む）、大串古墳と呼んでいる。

大串遺跡は、あらためて説明するまでもなく、平成4年3月3日に水戸市へ合併するまでは、東茨城郡常澄村塩崎の行政区画名で親しまれてきた。合併後の新名称は水戸市塩崎町と変った。

遺跡の位置と環境については、先般調査した『大串遺跡』（常澄村文化財調査報告第3集 平成元年十月）において記述したとおりであり、自然環境的、歴史的事実になんら変わりがないのでここに再度収録したいと思う。

遺跡の占地する水戸東南台地は、那珂川右岸に形成され、涸沼川との合流地点に向って発達し、先端部付近は標高18～25mを測る三角形状を呈する。東南に展開する沖積地は、標高2m前後の非常に広大な水田が続き、やがて涸沼川を介して大洗の洪積台地に至る。

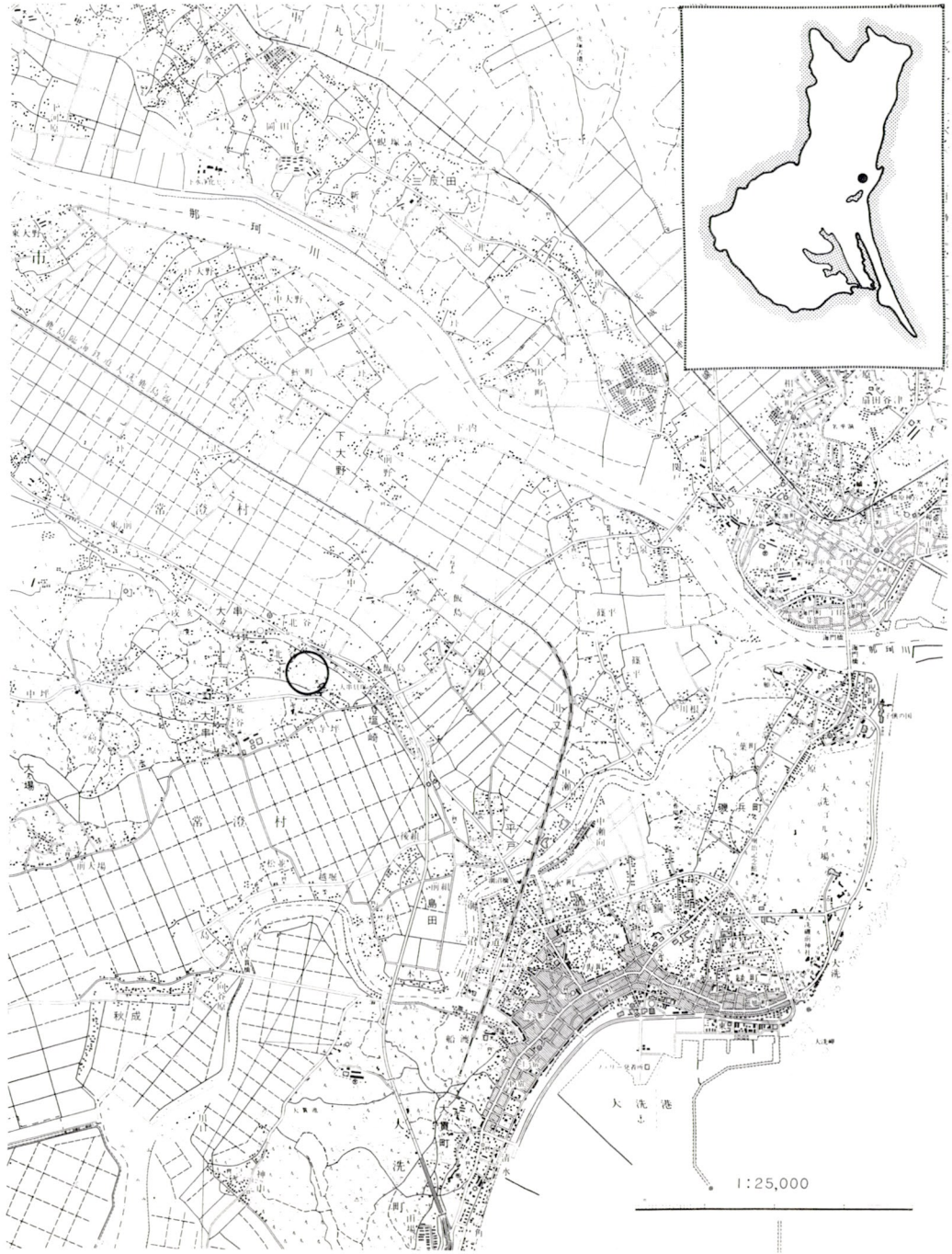
一方、那珂川の左岸には、三反田の台地が河口方面に発達し、両台地間は那珂川の形成した肥沃な水田地帯となっている。

貝塚が形成された縄文時代前期の海進時の頃は、台地の近くまで海水の影響を受けた汽水域がみられ、各所にラグーンを形成していたことは確実である。水域にはスズキ・ボラ・クロダイ・ドチザメなどの魚類が棲息し、砂泥底のラグーンはヤマトシジミやイソシジミなどが繁殖する好条件を備えていたと思われる。また、台地の森林はイノシシをはじめシカ・タヌキ・テンなどの中型哺乳動物にとり絶好の住処であったにちがいない。

やがて時代が推移して本遺跡で発見した住居址（古墳時代前期）を営む頃になると、海退現象は一層すすみ那珂川流域の水戸市環大野・同中大野遺跡の出土品が示すように、沖積低地の中でも標高4m程度の微高地は陸地化して、居住環境が台地から低地に拡大するようになり、これにともなって水田農耕の基盤も次第に確立されてくる訳である。

大串遺跡を取り巻く自然的環境の一端は、かならずしも各時代により同一とはいえないが、大略以上のように想察できよう。

現在、貝塚を含む常澄中学校西南側一帯は、昭和63年11月から始められた「大串貝塚周辺におけるふれあいのまちづくり事業」により、歴史公園（大串貝塚ふれあい公園）として整備がすすんでいる。そこには歴史資料の保管と展示、コミュニティ形成の場を目的としたL・E・Cセンター、ダイダラボウ伝説の巨人像、貝層断面観覧施設、縄文・弥生・古墳時代の復元住居などが建設され、さらにこのたびの道路拡幅によって、その景観は大きく変貌しつつある。



第一図 遺跡付近地形図 (○大串遺跡)

第三章 発掘調査の概要

今回の発掘調査は、大串貝塚ふれあい公園の西側道路、市道常澄8-1495号線の建設工事に伴うものである。調査区となった道路は、去る昭和63年11月25日から平成元年1月21日まで、「大串貝塚におけるふれあいのまちづくり事業」に伴って確認調査（第二次調査）をした第二調査区の西側に隣接しており、南北に細長い区域（長さ120m、幅12m）である。調査区の北端から北側の傾斜地にかけては、すでに掘削工事が進行中であり、調査の範囲から除外することにした。よって発掘調査の対象面積は約1,500㎡となった。

第二次調査の発掘報告書（『大串遺跡』平成元年10月）によれば、約1,000㎡の範囲内に古墳時代前期の住居址が5軒、東西に走る溝状遺構が1本発見されている。この事実を基に考えると、当初から同時代の住居址が数軒以上埋没していることが予想できる場所であった。実際に遺構の確認を実施した結果、前回と同じように古墳時代前期の住居址が9軒、あらたに後期の住居址が2軒と溝状遺構（時期不明）が出土し、予想を上回る住居址群の発見となった。こうした住居址は、さらに西側の畑地にまでひろがることも判明した。

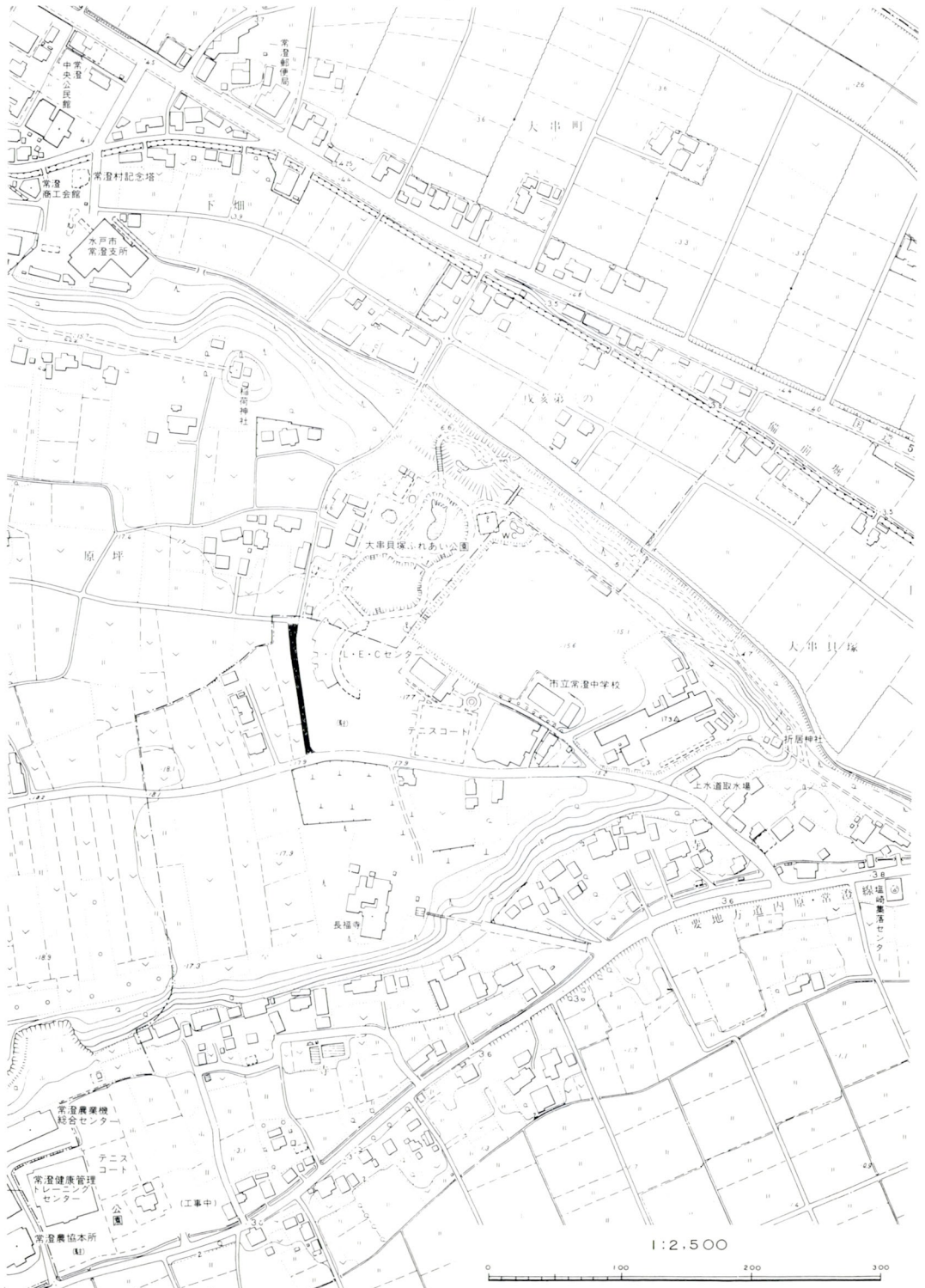
ここの畑地は、ごぼう栽培の跡もなく、耕作土（約35～40cm以下）の土層はほとんど無傷のような状態で黒色土が堆積し、遺構の確認作業に苦慮することはなかった。確認前の予想としては、前回同様に古墳時代前期の住居址が主体となることには間違いないとしても、これに中期の住居址が若干加わるかもしれないという期待もあったが、この時期の住居址は発見されなかった。

発掘調査に先立ち、遺構の確認は、調査区の南部から開始し、順次北側方向に移行する方法をとった。調査区内は、磁北（南北方向）を基準に5mの方眼を設定した。南北の縦軸にアラビア数字（算用数字）を用い、これに直交する東西の横軸にアルファベット記号を標記することにした。

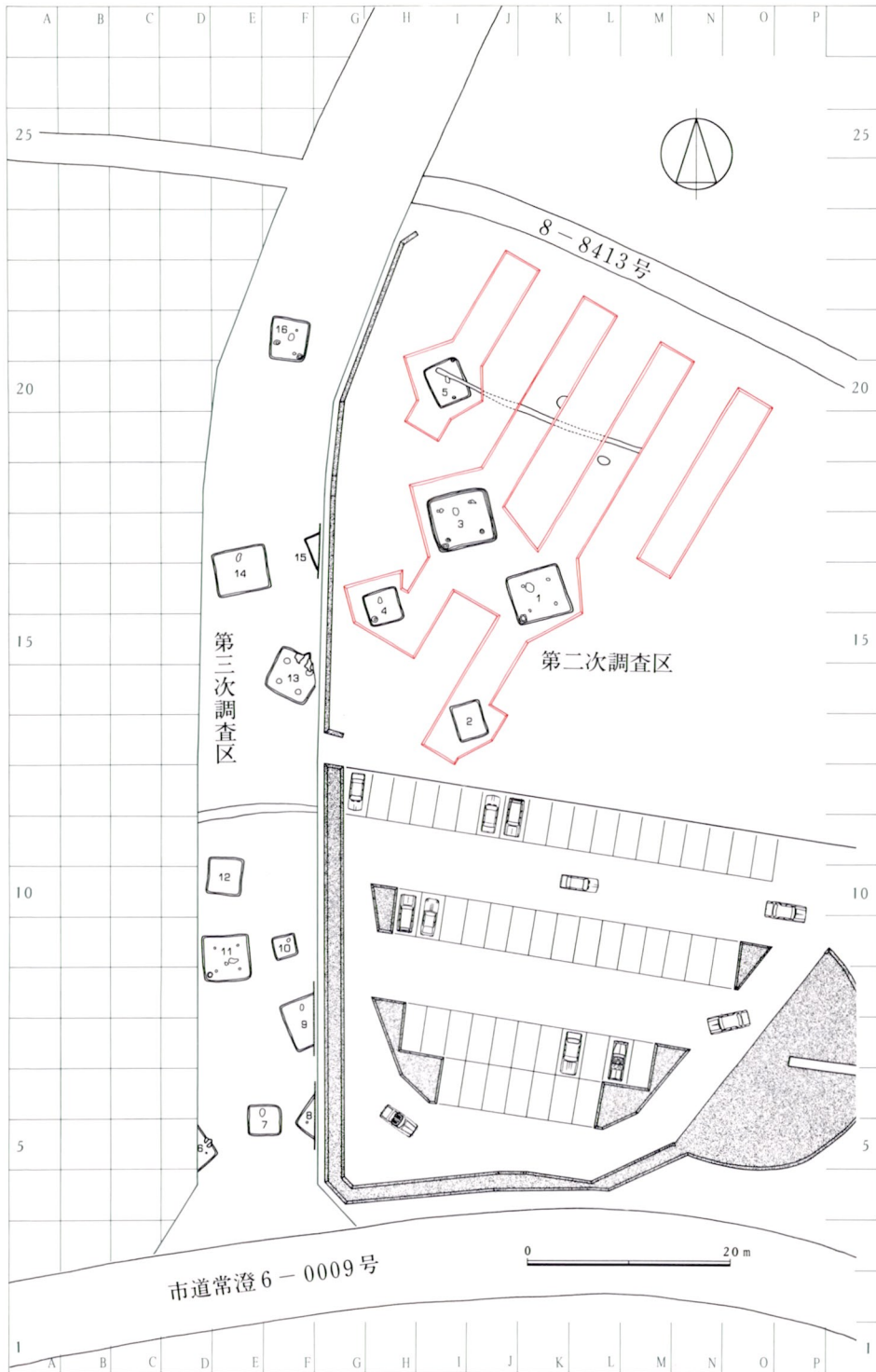
出土遺物の記録にあたっては、前回の第二次発掘と同様に“原位置”論的調査法を踏襲し、出土遺物を記録・収納することにつとめた。

今回の発掘調査において検出した遺構は、古墳時代前期と同後期から歴史時代におよぶ住居址と溝状遺構である。溝状遺構は時期不明であり、紙数の関係から説明を省略した。住居址は下記のように分けられる。

古墳時代前期の住居址	9軒
古墳～歴史時代の住居址	2軒



第二図 発掘調査区域図 (■ 発掘調査区域)



第三図 遺構分布図（第二・第三次調査区を含む）

第四章 古墳時代前期の住居址と出土遺物

今回の道路改良工事に先立って実施した調査において、竪穴住居址は11軒検出できた。調査区が限定されたために、完掘した住居址は6軒、未完掘の住居址5軒である。住居址は時期別に古墳時代の前期のものが主体となって9軒存在し、この他に新しい住居址2軒が発見された。

本遺跡においては、第二次調査（昭和63年～平成元年）で隣接した場所から、すでに5軒の住居址が出土しており、住居址番号の混同を避けるために、前回の番号を踏襲して第六号住居址から表示することにした。

古墳時代前期の住居址は、第七・八・九・一〇・一一・一二・一四・一五・一六号が該当する。

1 第七号住居址（第四・五図，図版第四・一七・二二）

規 模 北壁のW-X間と南壁のY-Z間はほぼ同じ長さで約3.4m、西壁のW-Y間と東壁のX-Z間も同様に約3.0mを測る。面積は約9.5㎡を有し、隅丸長方形を呈する。壁高は確認面から約35cmあり、ほとんど崩落せずに良好な状態で残っている。

床 面 全体に平坦であって、西壁寄りの部分が硬度3に相当する。他の部分は硬度2～3に比定できる。床面の下は、実測図に示すように貼床が施されている。周溝は存在しない。

ピ ッ ト 床面を丹念に精査したが、柱穴と思われるピットは検出できなかった。また貯蔵穴らしいピットも発見されなかった。

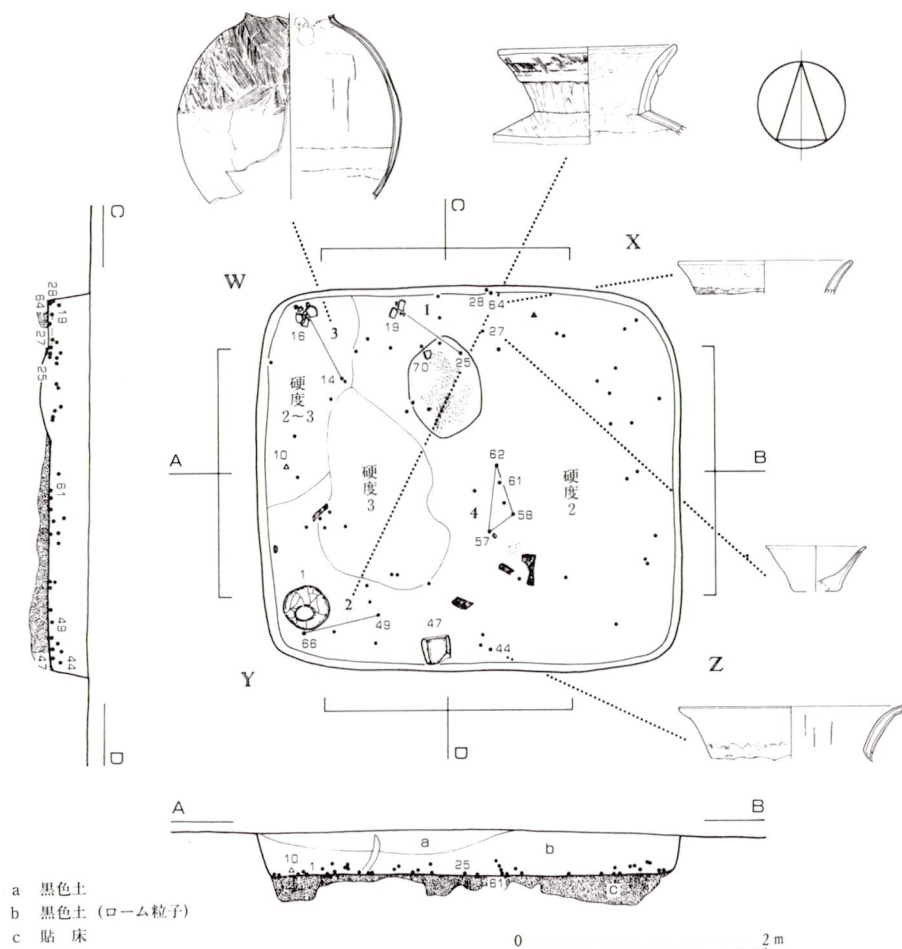
炉 址 床面中央から北壁に寄った位置に存在する。大きさは南北80cm、東西60cm、深さ10cmを測る地床炉である。底面に焼土が薄く散在する。炉石は存在しない。

埋 没 土 土砂はa黒色土（ほとんどローム粒子を混入しない）とb黒色土（ローム粒子を混入する）に区分される。この土砂は自然に流入埋没したものではなく、人為的に埋め戻した土砂である。竪穴住居址の内部に埋没している土砂が、自然的に埋没したものか、人為的に埋め戻したものかは、大洗町千天遺跡、旭村北山遺跡・定使面遺跡の報告の中で再三記述してきている。

遺物の出土状態 遺物の総数は67個である。種類別の内訳は、土師器63個、砥石1個、自然石3個である。自然石の中には、研磨用に使用された疑いのある47がある。

土師器の表裏関係は、表34個（54%）＋裏26個（41%）＋立ち3個（5%）＝63個（100%）という比率を示す。

ドットで記録した平面分布をみると、中央部に少なく、Zコーナーを除く周壁に沿った空間に散在するが、数量的にはそれほど多くない。北壁付近の接合資料1と3の接合線は、同一方向を示しており、あるいは廃棄の方向性に関係するかもしれない。A-B・C-D断面図に投影したドットは、大部分が床上15cmの範囲内に収まり、それより上方に出土しない。要するに、すべて



第四図 第七号住居址実測図

の遺物は、床面またはそれに近いレベルに存在しており、廃棄の同時性でもって処理しうる遺物である。

接合資料は、甕形土器に1例、壺形土器に2例と胴部の破片に1例が抽出できた。

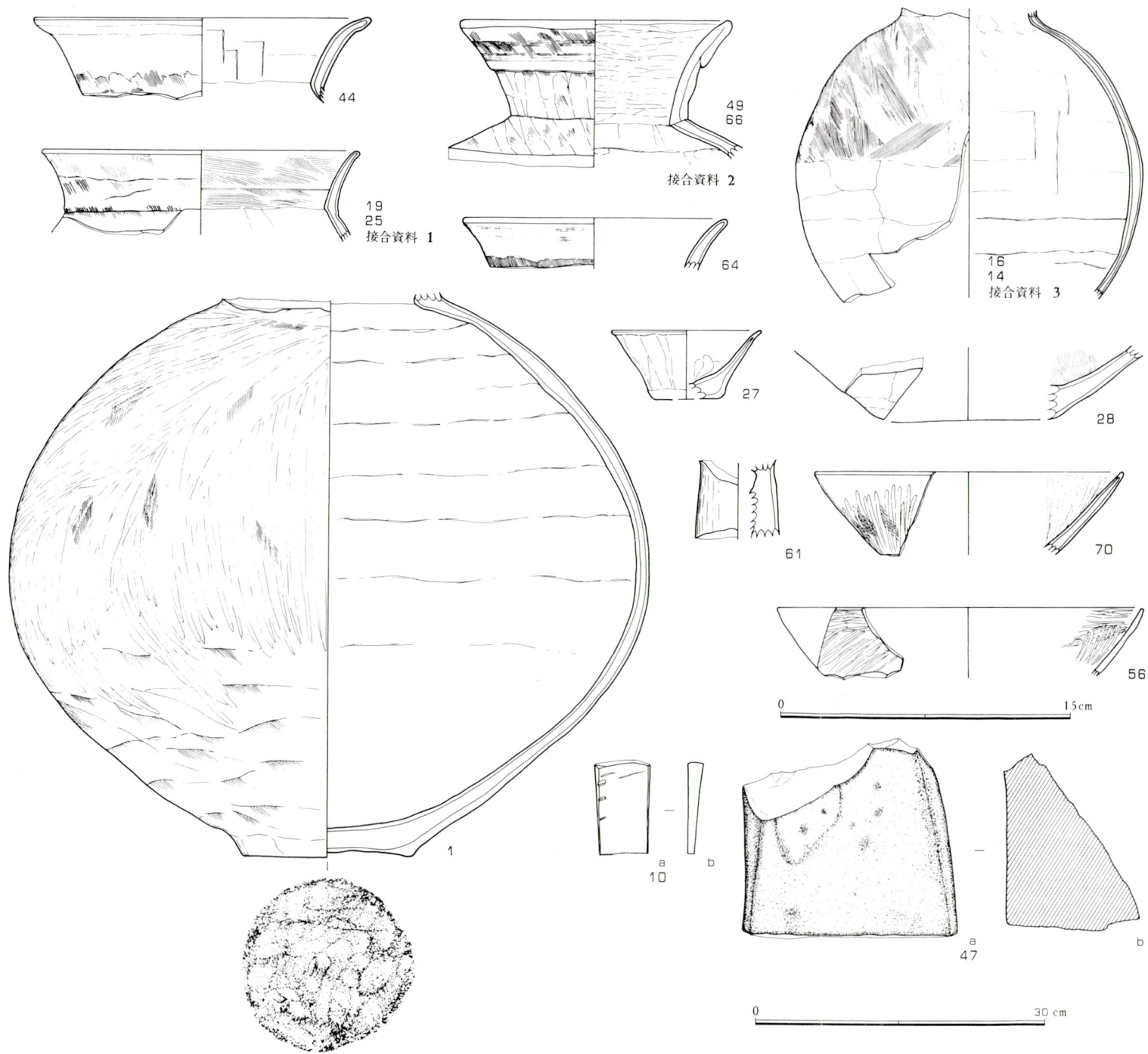
接合資料1〈甕形土器〉19△4・25▽0……20▽0

接合資料2〈壺形土器〉49△4・66▽0

接合資料3〈同〉14△7・16△4

接合資料4〈胴部〉57▽12・58▽5・62△11

遺物の概要 出土遺物の種類は、土師器、砥石、自然石の一面に使用痕のあるものなどである。土師器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高環形土器などの器種が認められる。



第五图 第7号住居址出土遺物実測図

甕形土器 口頸部破片は、くの字状に外反するものである。44は直線状に外方にのびて先端部が外反する。接合資料1は、頸部から外反して開き、内側に稜を残す。器の内外面は、刷毛目による調整後篋なでを行っている。

壺形土器 接合資料2は、頸部を強く屈曲させ、口縁部が外反する。口縁部は幅約2.5～3.0cmの粘土紐を貼付して、有段口縁を作出するが、一部に貼りつけたままのところも残し粗雑である。刷毛目調整後に篋なでを施している。口縁部内面は平滑に篋なで、頸部に稜を作り、胴部には輪積み接合痕がみられる。底部が突出し胴部を大きく張りだした大型壺1は、口縁部を欠損する。外面の上半は、刷毛目調整後に斜行、縦位の篋なでを入念に行い、下半は篋削りの後になでを施し、所々に刷毛目や輪積痕を残している。接合資料3は、口縁部と底部を欠失し、胴部は球状を呈する。器面の上半に刷毛目痕を顕著に残し、下半は篋削りを施す。

鉢形土器 27は小型の手づくねに近い鉢であって、外面は縦位の篋削りを行っている。赤褐色を呈し焼成は良好である。

高坏形土器 56・70ともに内湾しながら開く口縁部に相当する。前者の器面は丁寧に篋磨きを施し、後者は刷毛目による調整後に篋を使っている。61は柱状部の破片である。

砥石10 現存長50mm、最大幅29mm、厚さ8～4mmの大きさである。両面に使用痕を残す。良質の砥石であり、折損するまで使用したものである。那珂川上流産の珪岩質の石材である。

砥石47 長さ220mm、幅200mm、厚さ160mm程度の砂岩であって、一部欠損している。a面が平滑に磨滅しており、木製品や石製品を加工する際に研磨用に使用した大型の砥石かもしれない。

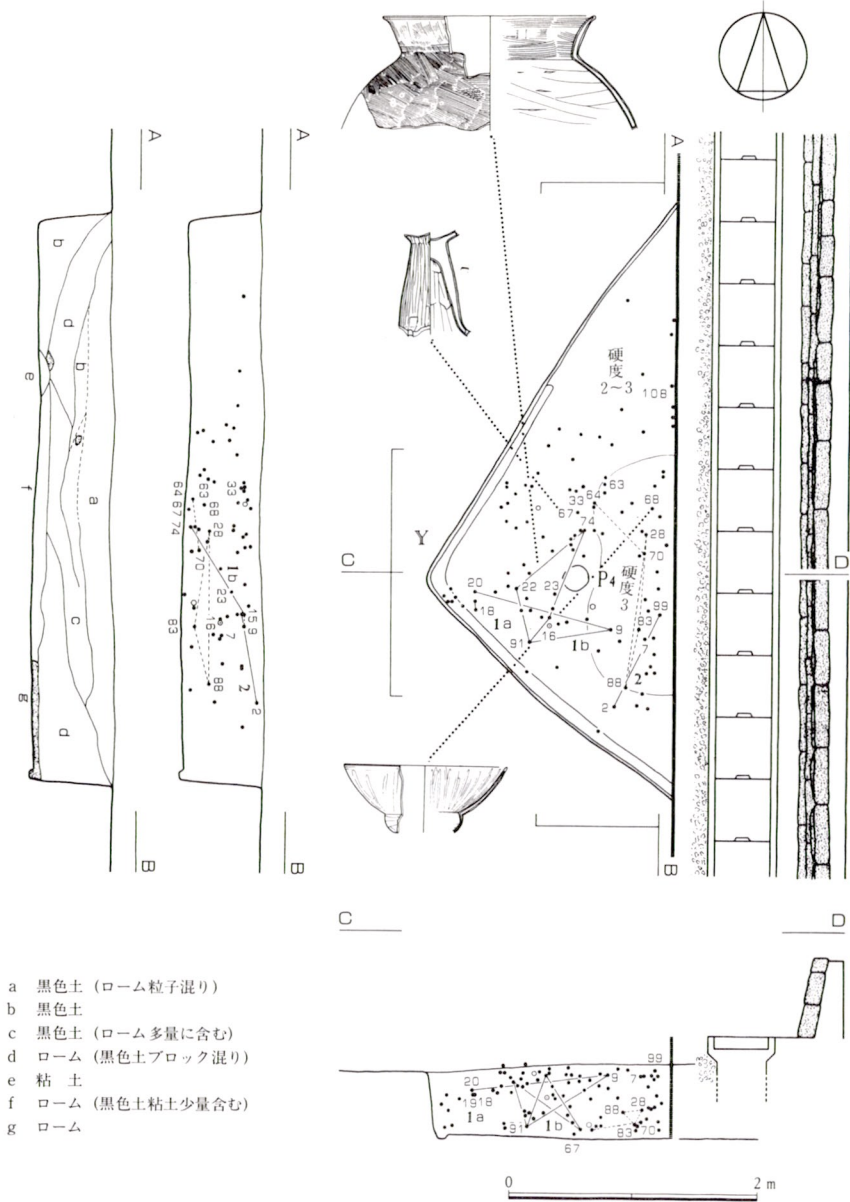
2 第八号住居跡（第六・七図，図版第五・二三）

規模 東側の約60%は、道路の側溝と大串貝塚ふれあい公園内に存在し、調査区域外に入り未完掘である。発掘部分の西壁（W-Y間）は3.6m、南壁（Y-Z間）は2.7mまで計測できた。おそらく後述する第一一号住居址に類似した、一辺4.5mの方形または長方形のプランが考えられる。壁はほとんど垂直に近く立ち上がり、高さは50～60cmを測るけれども、壁面の崩落はみられない。

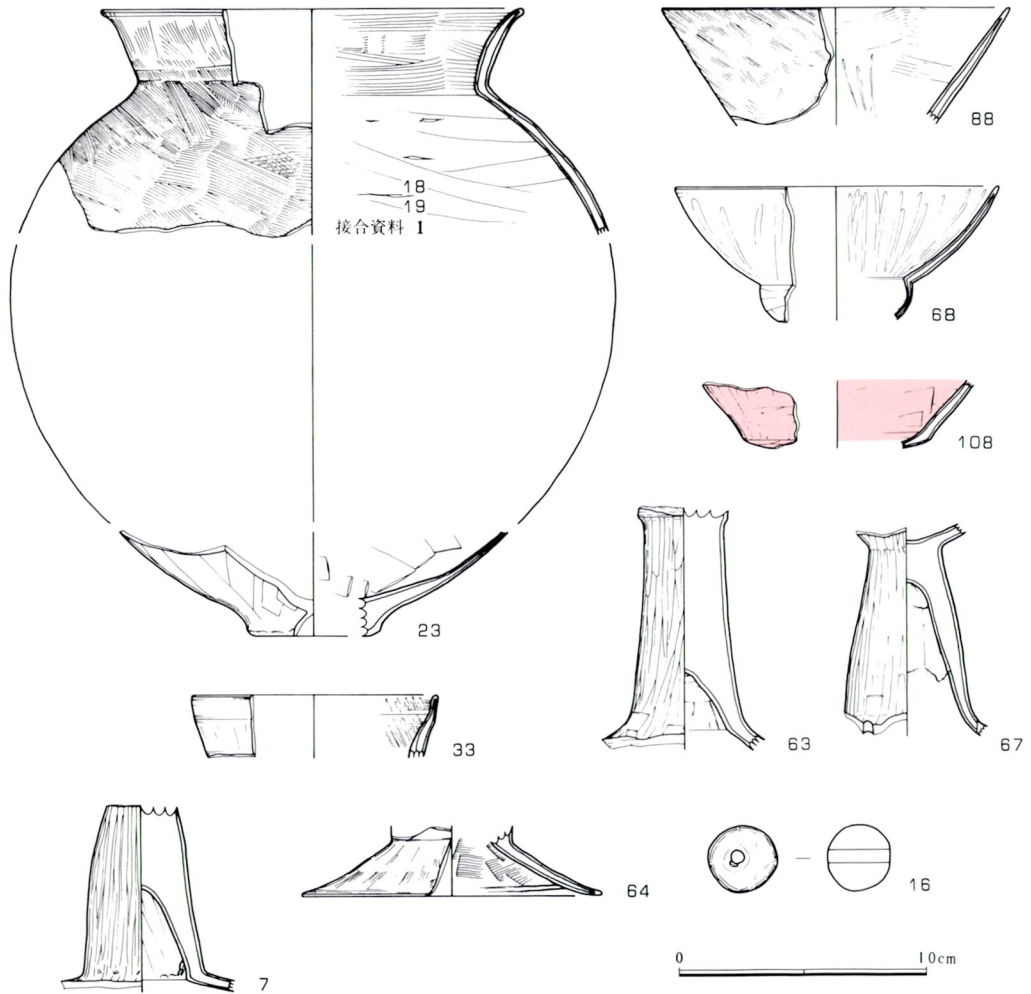
床面 ほぼ平坦に掘られ、内区は細かい凹凸があり硬度3。外区は硬度2～3に相当する。南壁から西壁に沿って幅10cm、深さ5cm前後の浅い周溝がめぐる。

ピット・炉址 柱穴はP4（直径20cm、深さ40cm）が検出され、他の3本は調査区外に存在する。炉址も同様であろう。

埋没土 竪穴内は、断面図A-Bに示すような細分ができ、黒色土（ローム粒子混入）やローム（黒色土・粘土混入）などが廃棄された層相である。人為的埋没土砂。



第六図 第八号住居址実測図



第七図 第八号住居址出土遺物実測図

遺物の出土状態 小面積にもかかわらず総数110個の土器破片を主とした遺物が発見された。しかし、この平面分布のありかたで竪穴全体を律することはできない。垂直分布を断面のドットで観察すると、確認面から床面までほとんど間断なく散在する。また、個々の接合線は、上下に連結する事例が多く、竪穴内へは土砂の埋め戻しと、ほぼ同時に棄てられたものである。

接合資料は、甕形土器に2例認められる。

遺物の概要 本址出土の遺物は、土師器と球状土製品（土錘）である。土師器の器種には、甕形土器、鉢形土器、埴形土器、高环形土器などが含まれる。

甕形土器 接合資料1と23が同一個体である。頸部はくの字状に外反して開き、直線状にのびる口縁部先端が少し外反する。胴部は球状にふくらんで突出する底部に移行する器形である。刷

毛目による調整が施される。

鉢形土器 68は底部から大きく内湾して開く口縁部である。篋磨きを施している。

埴形土器 88は直線状に外傾する口縁部の破片であり、刷毛目調整後に篋磨きを施す。33もこの器種であるかもしれない。

高坏形土器 108は坏部破片で内外面に赤彩を施す。63・67・7は脚部破片、64はハの字状に開く裾部である。内外面に刷毛目痕を残している。

土 錘16 直径25 mm、重量20 gの球状土製品である。中央に径5 mmの貫通孔を有する。

3 第九号住居址（第八・九・一〇・一一図，図版第五・六・一八）

規 模 住居址の東側半分がL・E・Cセンター内に入り未発掘である。西壁（W-Y間）の全長は約4.8m、北壁（W-X間）は約3.5mまで確認した。炉址の位置が北壁のほぼ中間であれば、約4.0mの長さになって、形状は隅丸長方形と考えられる。面積は推定約19 m²である。壁高は16～20 cmを測る。壁面はほとんど垂直に掘り込まれ、崩落していない。

床 面 硬度3に相当する部分は、炉址の南側と南壁寄りの2か所に存在し、それ以外の床面は硬度2～3と考えられる。床面の下には貼床が施される。

ピ ッ ト Yコーナー近くのピット（直径30 cm、深さ50 cm）を除いては、なぜか柱穴に相当するピットが検出できなかった。住居址の規模から考えても不思議である。

炉 址 北壁に近い床面上にあって南北に長い。直径約130 cm、短径は南側で75 cm、深さ15～20 cmを測る。焼土は北半部と南半部の3か所に堆積する。

埋 没 土 黒色土aとローム粒子、焼土を混入した黒褐色土bが堆積し、稀に床面上にロームの小ブロックcが存在する。埋没土は明らかに埋め戻した土砂である。

遺物の出土状態 ドット・マップに記録した平面分布状態は、北壁寄りとYコーナーの近くの空間に集中して存在し、中央のA-Bセクション付近は僅かに数える程度である。この状態をC-Dセクションの投影図で見ると、北側のグループは床面から床上15 cmのレベル内に出土し、12例の接合資料の中には、レベル差の小さい資料が多い中であって、接合資料1・14・16のように8～12 cmの差で接合する例もある。Yコーナー付近のものは、すべて床面上の資料で一括廃棄されたものである。

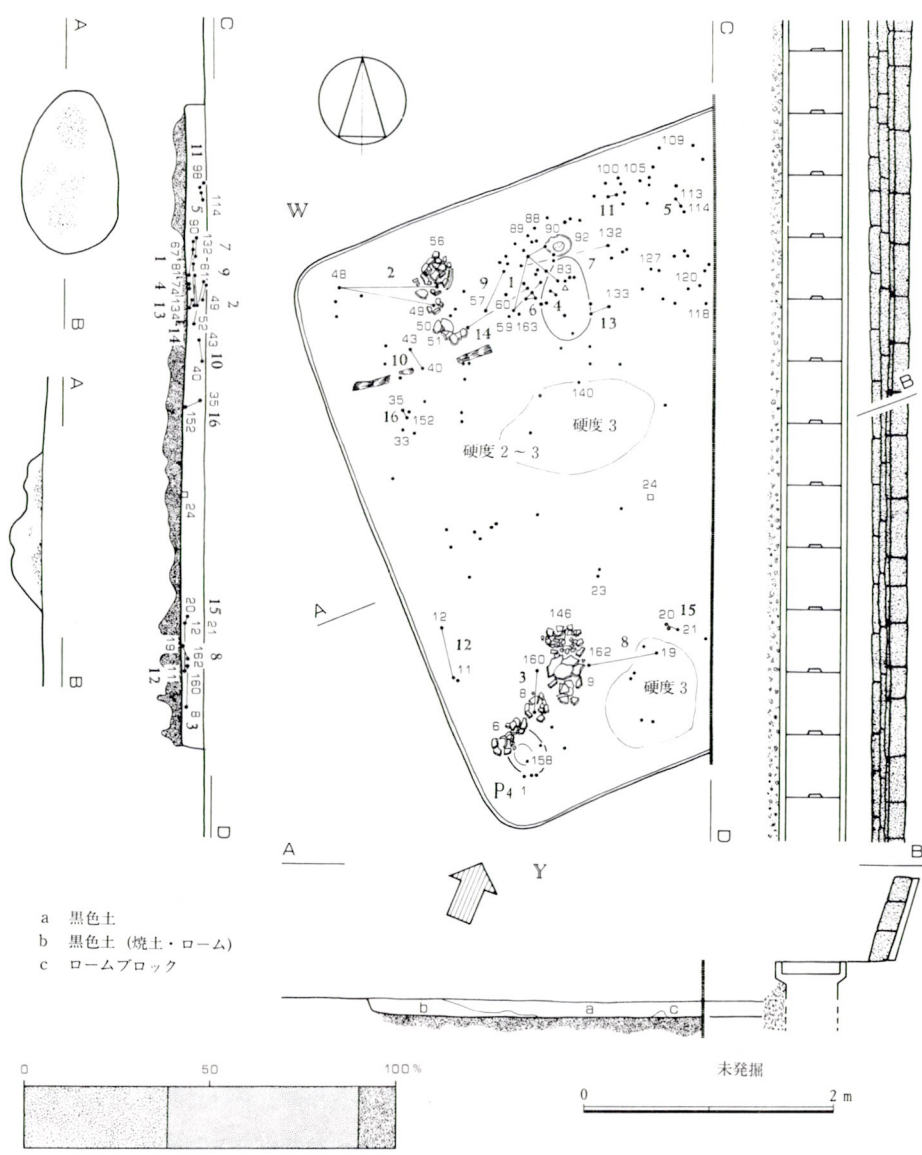
接合資料は、北側のグループ内に12例、Yコーナー付近に4例、合計16例が抽出できた。

接合資料1 < 甕形土器 > 81△0・79△3・67△5・90▽6・60△3・75▽7……50▽10

接合資料2 < 同 > 48△13・49△13・56△13

接合資料3 < 同 > 7▽3・8△5・160▽5

接合資料4 < 同 > 74△0・148△0（口縁部破片）



第八図 第九号住居址実測図

接合資料5 < 同 > 113△112・114▽14 (口縁部破片)
 接合資料6 < 同 > 69▽4・70▽4・149▽0 (胴下部破片)
 接合資料7 < 同 > 161△5・132△7 (胴部破片)
 接合資料8 < 同 > 162▽5・19△4 (胴部破片)
 接合資料9 < 壺形土器 > 39▽8・57▽5・61▽6 (口縁部破片)
 接合資料10 < 同 > 40△11・43△10 (口縁部破片)
 接合資料11 < 同 > 97△11・98△12 (胴部破片)
 接合資料12 < 鉢形土器 > 11△3・12△3
 接合資料13 < 同 > 133△0・134▽0
 接合資料14 < 高環形土器 > 52△5・82△13
 接合資料15 < 同 > 20△5・21△3
 接合資料16 < 同 > 35△12・152△0

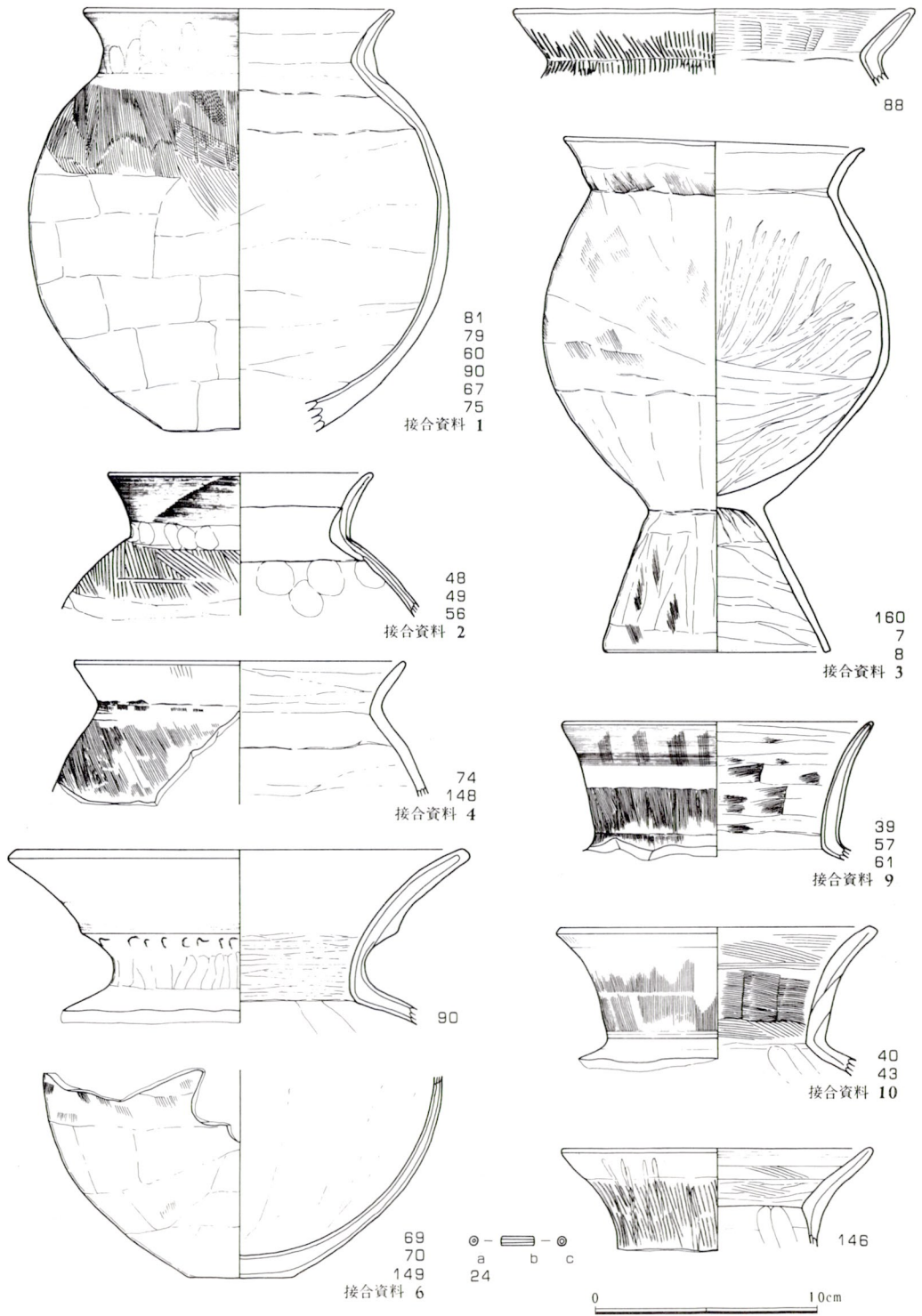
遺物の概要 総数は159個を数える。内訳は、土師器(完形土器を含めて)157個、石製品(管玉)1個、自然石1個である。

土師器の器種は、甕形土器、台付甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高環形土器、器台形土器、手づくね土器などに分けられる。

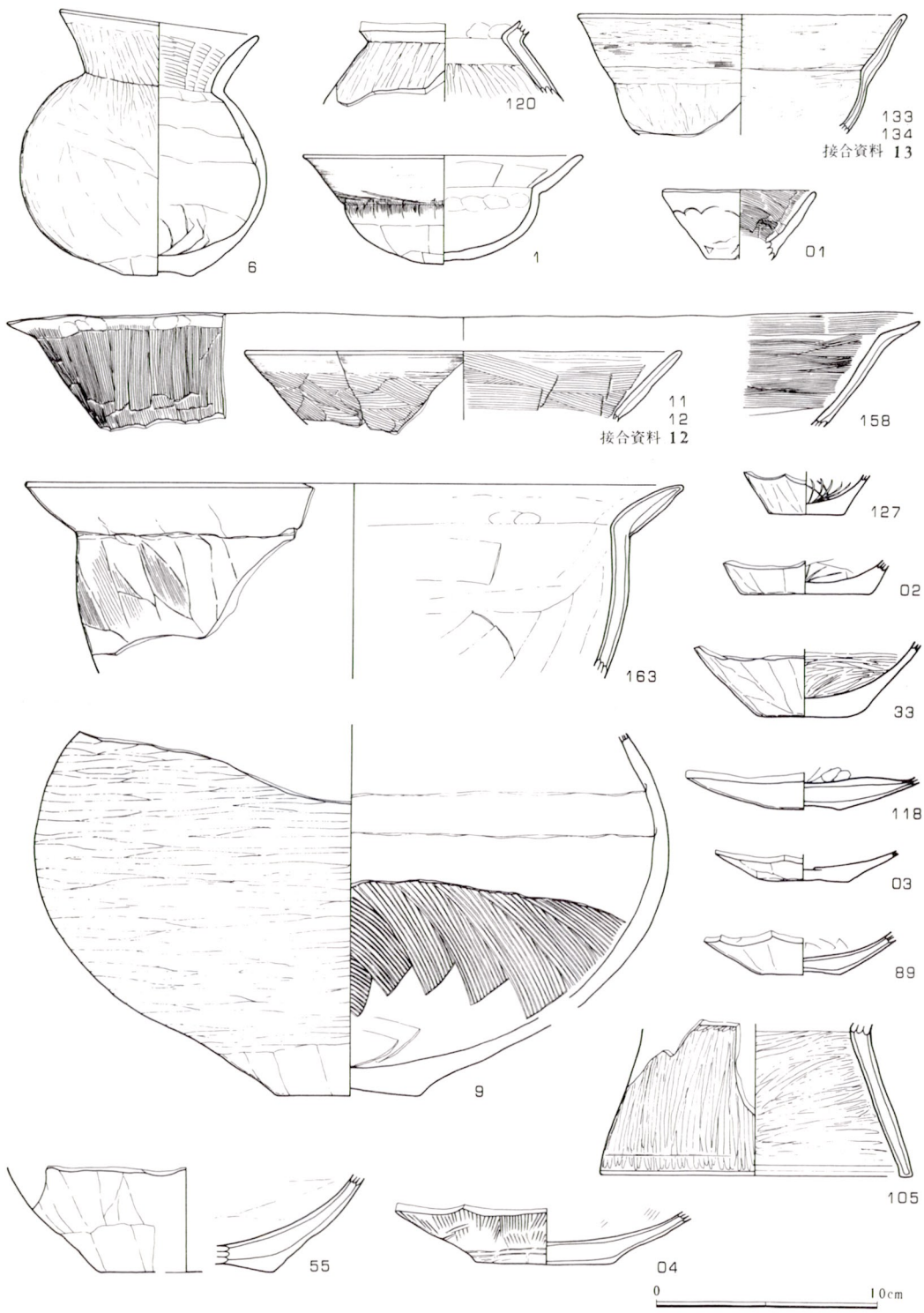
甕形土器 平底と台付の2種類が存在する。接合資料1の器形は、球状にふくらむ胴部から口縁部が外反して開く。底部を欠失しており平底、台付の区別は不明である。口縁部外面になで、胴部上半に刷毛目を施し、下半部は篋削りを行っている。接合資料2・4なども同じような器形の甕であろう。台付甕の接合資料3は、口縁部が外反し、胴部の張りはやや弱くなる。脚台部は斜め外方に直線状にのびる。口径13.5cmの甕に付く台部としてはやや高すぎる。器面の調整は、刷毛目と篋を用いており、一部に輪積痕を残している。105は大型甕の台部で底径14cmを測る。

壺形土器 口縁部の形状が単口縁と有段口縁のものがある。単口縁の接合資料9・10・146は、口縁部が長めに立ち上がって外反する。胴部に接合する破片がないけれども、多分9のように胴部がふくらみ、底部が突出気味の壺になるだろう。器面の調整は篋と刷毛目による。6は小型の壺で外反する口縁部の下に球状の胴部、上げ底風の底部を付している。器面は篋で滑らかに調整される。90は有段口縁の大型壺で胴部を欠失する。内外面ともに磨滅がみられ、有段部の下端に接合痕を僅かに残す。

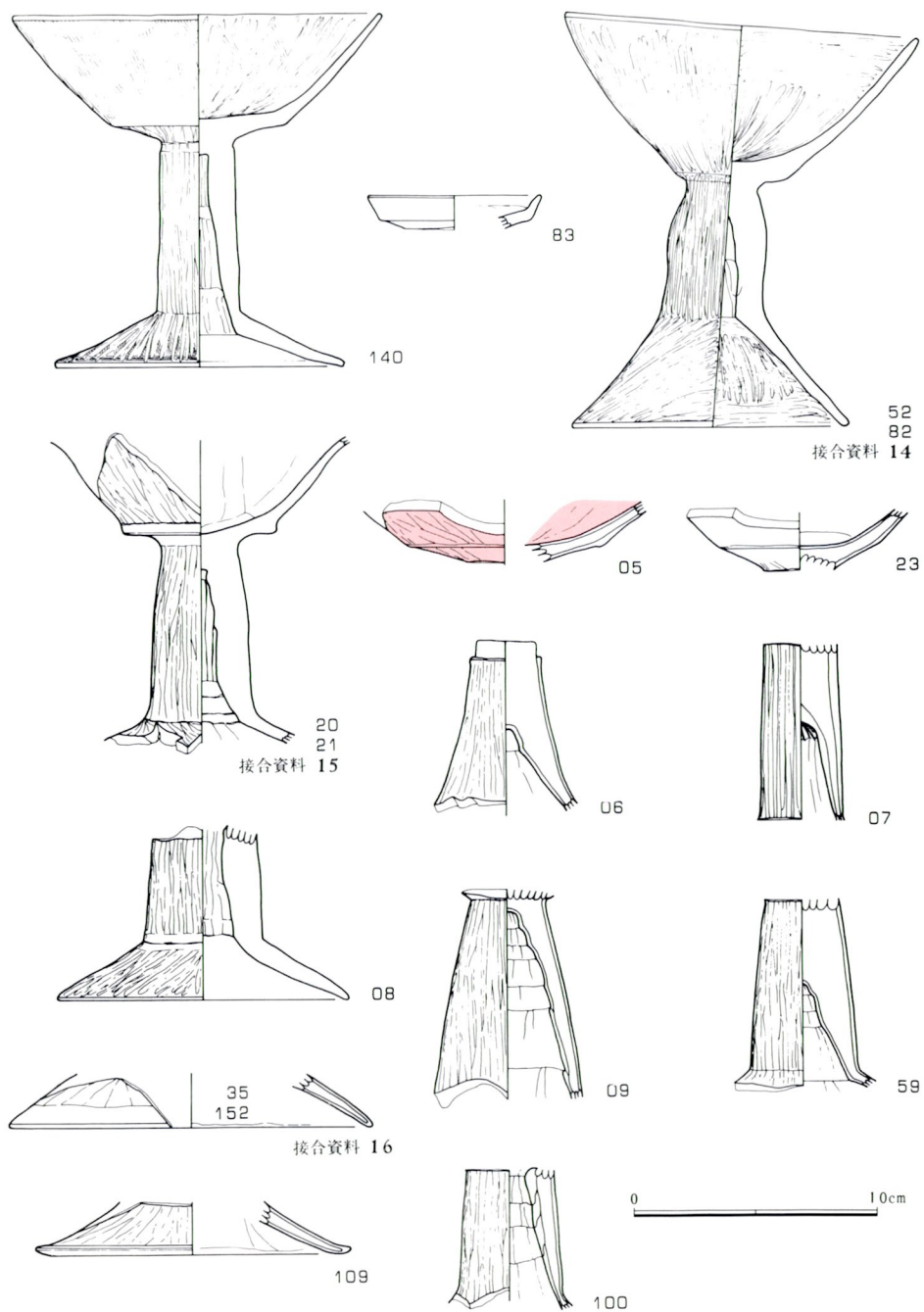
鉢形土器 胴下部を欠損した大型土器が数点存在する。器形は頸部を屈曲させて口縁部が外方に開く。該当する土器は接合資料12・158・163である。前二者の器内外面は刷毛目により調整し、後者は篋と刷毛目を併用している。この種の土器は、第三号住居址出土の接合資料9と同一に考えられる。小型の鉢1は、丸底の底部から胴部が内湾して立ち上がり、口縁部が屈曲して外



第九图 第九号住居址出土遗物实测图(1)



第一〇図 第九号住居址出土遺物実測図(2)



第一一図 第九号住居址出土遺物実測図(3)

方に開く。接合資料13は頸部を僅かに屈曲させている。器面は篋磨きを施し平滑である。01は確認面出土の小型鉢で底部を欠失する。

高坏形土器 完形品が2例存在し、140は底部から口縁部がゆるやかに内湾して開き、脚部は柱状に長くのび、裾部が屈曲して八の字状に開く。接合資料14の器形は若干相違して、小さな底部から、口縁部が内湾しながら開き、柱状の脚部は中程がふくらみ、裾部は約45°の傾きで直線状に開いている。接合資料15の坏部は、底部に段を形成し、口縁部が外反して開く。脚柱部は07のように柱状を呈するもの、09のように中位から下部にふくらみをもつもの、06のように開くものなどに分けられる。05の坏部破片には赤彩が施されている。器面はすべて篋による調整である。

器台形土器 83は底部から口縁部が斜めに短く立ち上がる。破片が小さいので断定しえないが器受部に相当する部位と考えられる。

管玉 24 小型で細身の完形品である。長さ15mm弱、直径4mm弱、中央に貫通孔（片側穿孔）がある。石質是那珂川上流産の珪岩が使われている。

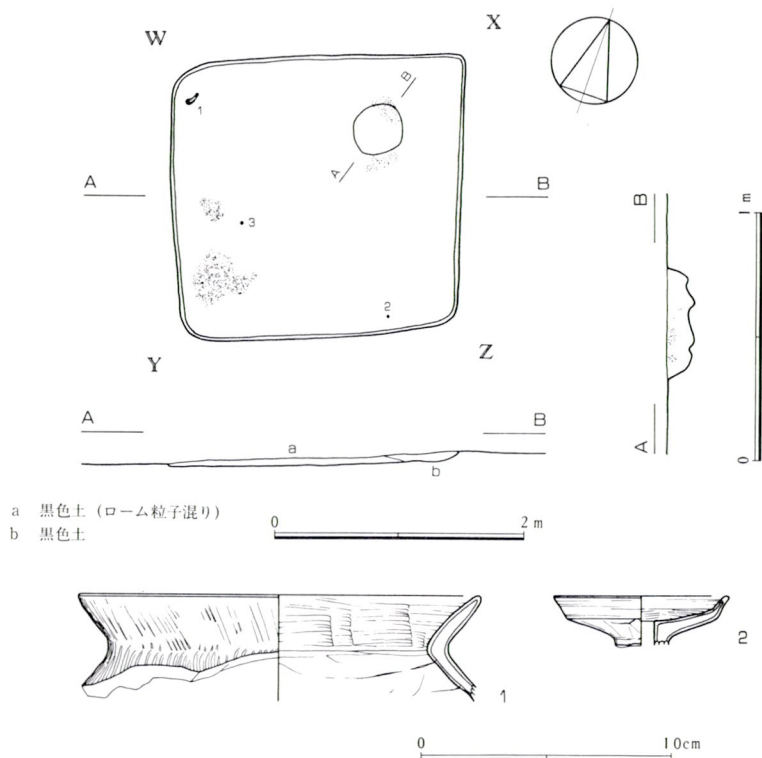
4 第一〇号住居址（第一二図、図版第七）

北壁約2.3m、南壁約2.2m、東西壁約2.5mの小型の住居址である。面積約5.6㎡。不整形。壁高は確認面から僅かに10cmを測る。

床面は全体に硬度2～3に比定できる。柱穴と思われるピットを掘り込んだ形痕は全く存在しない。床面の西壁寄りの2か所に厚さ5cmの粘土を多く含んだロームの堆積がみられた。

炉址は、中央北寄りという通常的位置ではなく、東に片寄って存在する。大きさは直径約40cmの略円形を呈し、底部に2～3cmの厚さで焼土が残っている。また外縁の2か所にも認められた。

出土遺物は、図示したものを含めて、土師器の破片が3個出土した。器種は甕形土器と器台形土器である。甕形土器1は、口縁部から上胴部の破片で、頸部は、くの字状に屈曲し、口縁部が外傾する。胴部は球状に大きくふくらむ仲間であろう。器面の調整には刷毛面が使われる。2は器台形土器の器受部の破片で、外方に開く底部から口縁部が斜めに立ち上がる。中央には円孔を貫通させている。器面は平滑である。



第一二図 第一〇号住居址・出土遺物実測図

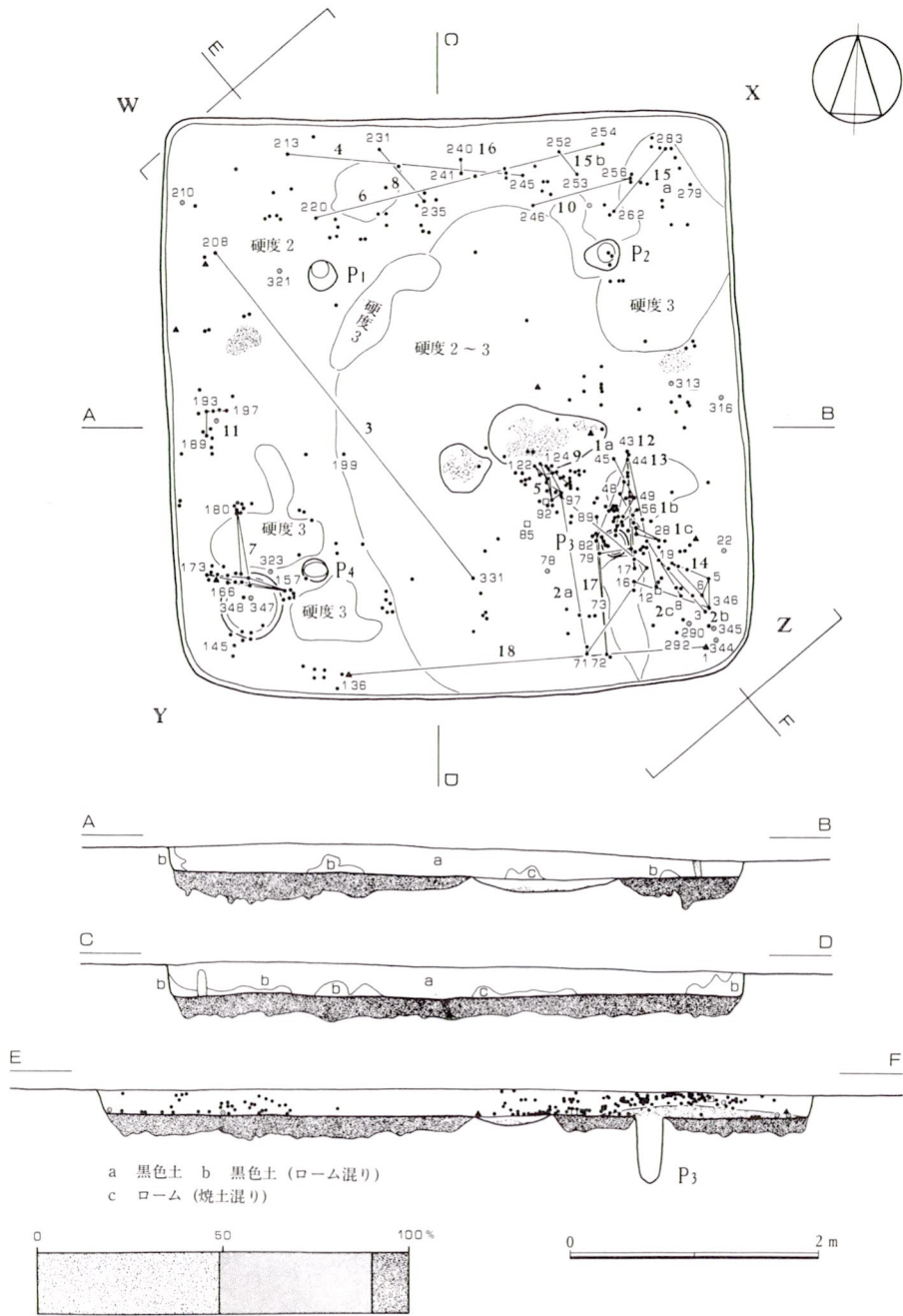
5 第一一号住居址 (第一三・一四・一五・一六図, 図版第七・八・九・一九・二三)

規模 北壁と南壁の辺長は、ほぼ同じ長さで約4.5m, 西壁と東壁も同様である。面積約20㎡の隅丸方形を呈する。確認面からの壁高は23～25cmを測る。ほとんど垂直に掘り込んであり、壁面に崩落はみられない。調査区の中では比較的良好な状態で発見された住居址である。

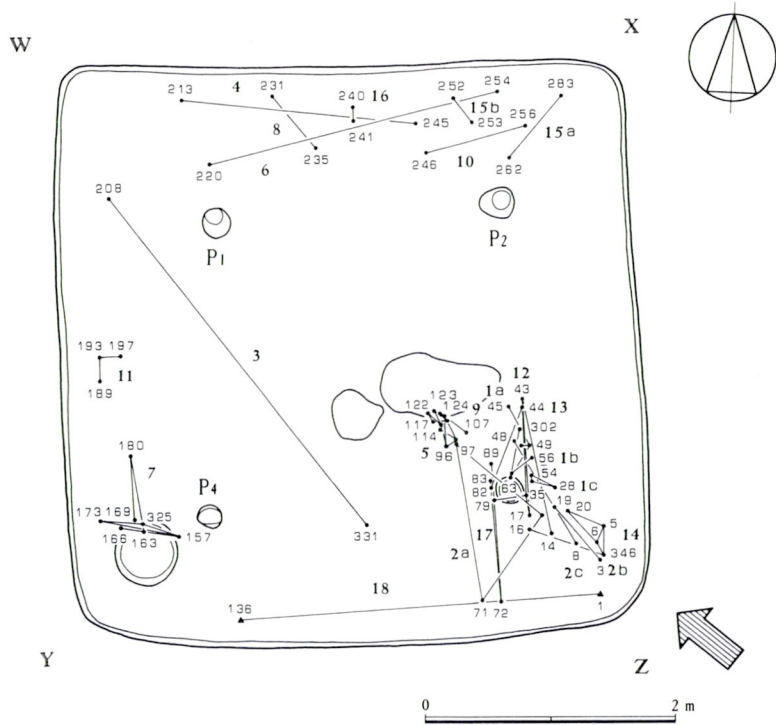
床面 硬度は、一般的な床面と著しく相違し、内区と外外に区別できない。硬度3に相当する床面は、北半部についてみると、P₁の東側に2か所、P₂から東壁に1か所、南半部ではP₃の東側に2か所、P₄の南と北側に2か所認められ、P₁～P₄の東側大部分は硬度2～3、同じく西側が硬度2に比定できる。こうした床面の下には、断面図に示すような貼床が施されている。

ピット 柱穴に該当するピットは、各コーナーを結ぶ対角線上に、ほぼ等間隔で4本検出できた。各柱穴は、直径20～25cm, 深さ63～70cmを測る。また、Yコーナー近くの床面には、略円形(直径50cm, 深さ52cm)の貯蔵穴と思われる大型のピットが存在する。

炉址 中央から僅かに東寄りに位置する。東西方向に細長く、直径95cm, 短径50cm, 焼土は10～14cmの厚さで残る。また、床面が赤変して焼土化した地点が、炉址の南側、中央の東西両壁近くの3か所にみられた。これは炉址と区別して考えるべきであろう。



第一三图 第一一号住居址实测图



第一四図 第一一号住居址接合関係図

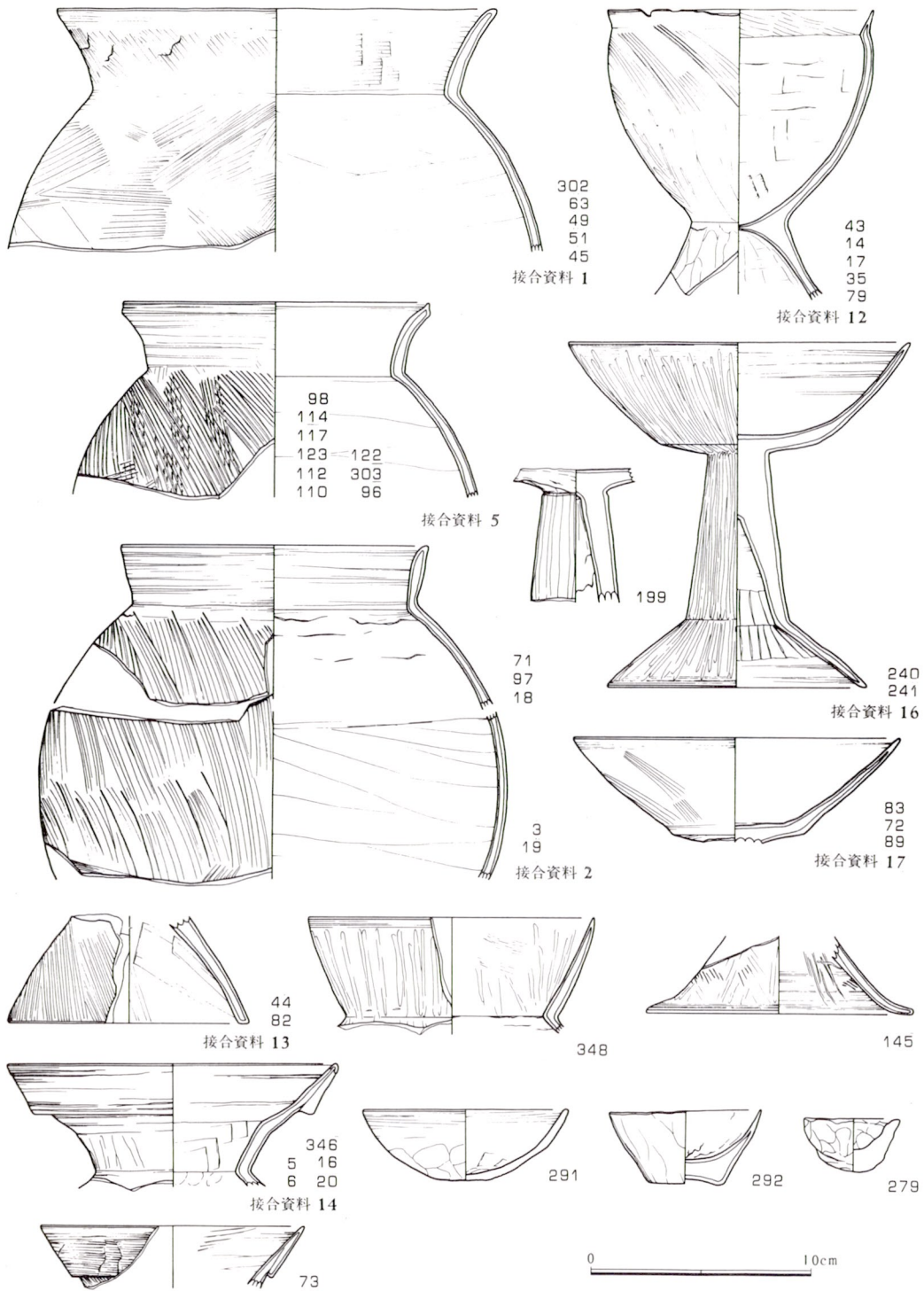
埋没土 竪穴内は黒色土 a で被覆されるが、所々にローム粒子を混入した b がブロック状に散在する。また Z コーナーから炉址にかけての一带には、廃棄ローム（厚さ 10 cm 前後）の堆積がみられる。

遺物の出土状態 ドット・マップによる平面分布は、中央部に少なく外区全面に散在し、特に Z コーナーから炉址にかけての出土量が顕著である。E-F セクションの両側 1 m 範囲のドットを投影してみると、Z コーナー寄りのグループは、大略出土レベルと接合線の方向が一致して、壁外から投棄されていることがわかる。北壁に近いグループは、東西方向に接合するものが 4 例、北西-東南方向のものが 3 例みられる。Y コーナーに近いグループは、別個の接合関係を示す。3 グループの廃棄場所と方向は、それぞれ相違していることがうかがわれる。

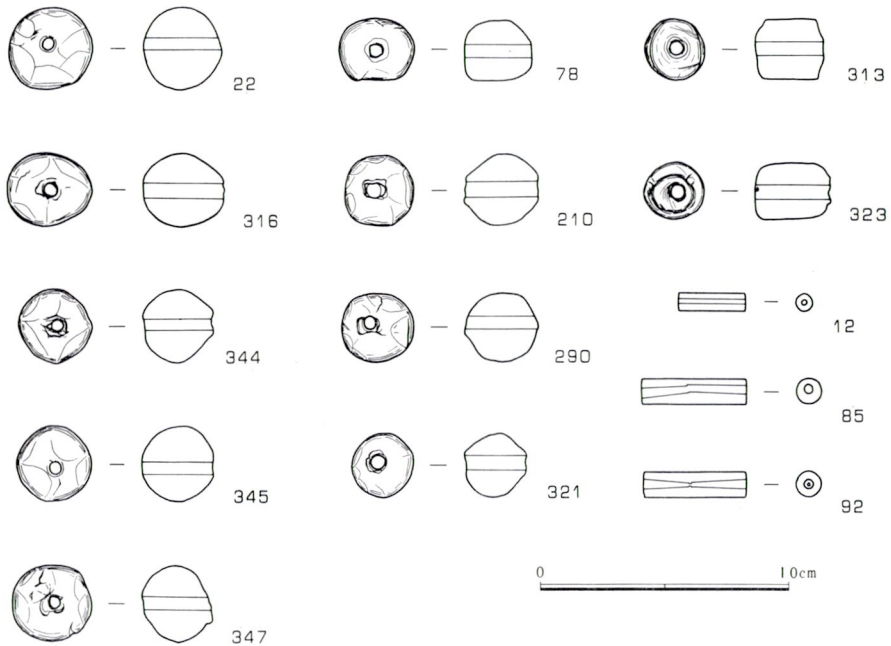
土器破片の表裏関係は、表 156 個 (49%) + 裏 131 個 (41%) + 立ち 33 個 (10%) = 320 個 (100%) という比率である。

接合資料は、土師器に 17 例（甕形土器 13 例，壺形土器 2 例，高環形土器 2 例）と自然石に 1 例，合計 18 例が抽出できた。個別の接合資料は紙数の関係で省略する。

遺物の概要 出土遺物は、土師器，土製品，石製品（管玉）と自然石である。土師器の器種は、甕形土器，壺形土器，埴形土器，鉢形土器，坏形土器，高環形土器，手づくね土器などが含



第一五图 第一一号住居址出土遺物実測図(1)



第一六図 第一一号住居址出土遺物実測図(2)

まれる。

甕形土器 単口縁の平底のものと脚台を付したものが存在する。接合資料1・5は、口縁部がくの字状に外反して開き、頸部内面に稜を残し、胴部は球状にふくらむ。器面に斜めの刷毛調整を施す。接合資料2は、口縁部が直線状に斜め外方に立ち上がる。胴部の刷毛目は斜行する。接合資料13は、脚台部の破片であり、外面に刷毛目調整が施される。接合資料12は小型の台付甕である。頸部から短かく立ち上がる口縁部は、先端が薄くなり、頸部の内面に稜を形成する。胴部は底部に移行するにしたがい小さくなって、弱く外反する脚台が付される。器面の調整は篋と刷毛目を併用する。

壺形土器 複合口縁と有段口縁の種類が認められる。73は粘土帯を薄く貼付した複合口縁壺の口縁部破片である。接合資料14の口縁部は、頸部から外方に段をなして開く有段口縁の壺で、胴部を欠損している。口縁部に横なでを施し、頸部を篋で調整する。

埴形土器 140は外傾して開く口縁部、348はくの字状に弱く内湾しながら開く口縁部で、頸部内面に稜を有する。外面に篋磨き、内面に横なでを施す。

鉢形土器 292は手づくね製と思われる。内面は平滑に調整し、外面全体に磨滅がみられるが、僅かに篋削り痕を残す。底面中央は幾分くぼんでいる。

坏形土器 291は丸底状の底部から内湾して開く器形である。内面になでを行い、外面は口縁

部を除き鏡削りにより整形している。

高環形土器 接合資料16の口縁部は、底部から内湾気味に大きくひろがり、柱状にのびる脚部は屈曲して外方に開く。器面は鏡調整を入念に施す。接合資料17の坏部も前者と同様の器形を呈する。器面の一部に刷毛目痕が残る。坏部と脚部の接合は嵌入式である。146・199の脚部破片も同一型式に属する。

手づくね土器 279は直径約4cm、高さ2.5cmの大きさである。非常に粗雑なつくりで内外面に指頭痕を残す。

土製品 球状土製品（完形品9個、欠損品1個）と管状土製品（完形品2個）が出土している。

球状土製品は、直径25～30mmの大きさまでであるが、大部分のものは直径30mmを測る。中央に5mmの貫通孔を有する。重量は14～31gまであり、24g前後のものが多い。

管状土製品313・323は、直径20～25mm、長さ約30mm、中央に貫通孔を有する。重量は前者が22g、後者が20gである。

管玉 完形品が3個出土している。細身の12は、長さ27mm、直径7mm、径2mmの貫通孔がある。85は、長さ42mm、直径10mm、径2～4mmの両側穿孔がみられる。92は、長さ41mm、直径10mm、両側から穿孔されている。

これらの管玉は那珂川上流産の珪岩に加工を施したものである。

6 第一二号住居址（第一三図、図版第三）

規模 北壁（W-X間）約3.5m、南壁（Y-Z間）約3.4m、西壁（W-Y間）約3.6m、東壁（X-Z間）約3.7mの大きさを有する。面積は約12.6㎡を有する。形状は隅丸の不整形である。壁高は確認面から10cm前後を測る。

床面 踏み固めた形跡はみられず、全面に硬度2の軟らかさである。これは竪穴の廃絶時期と関係するかもしれない。

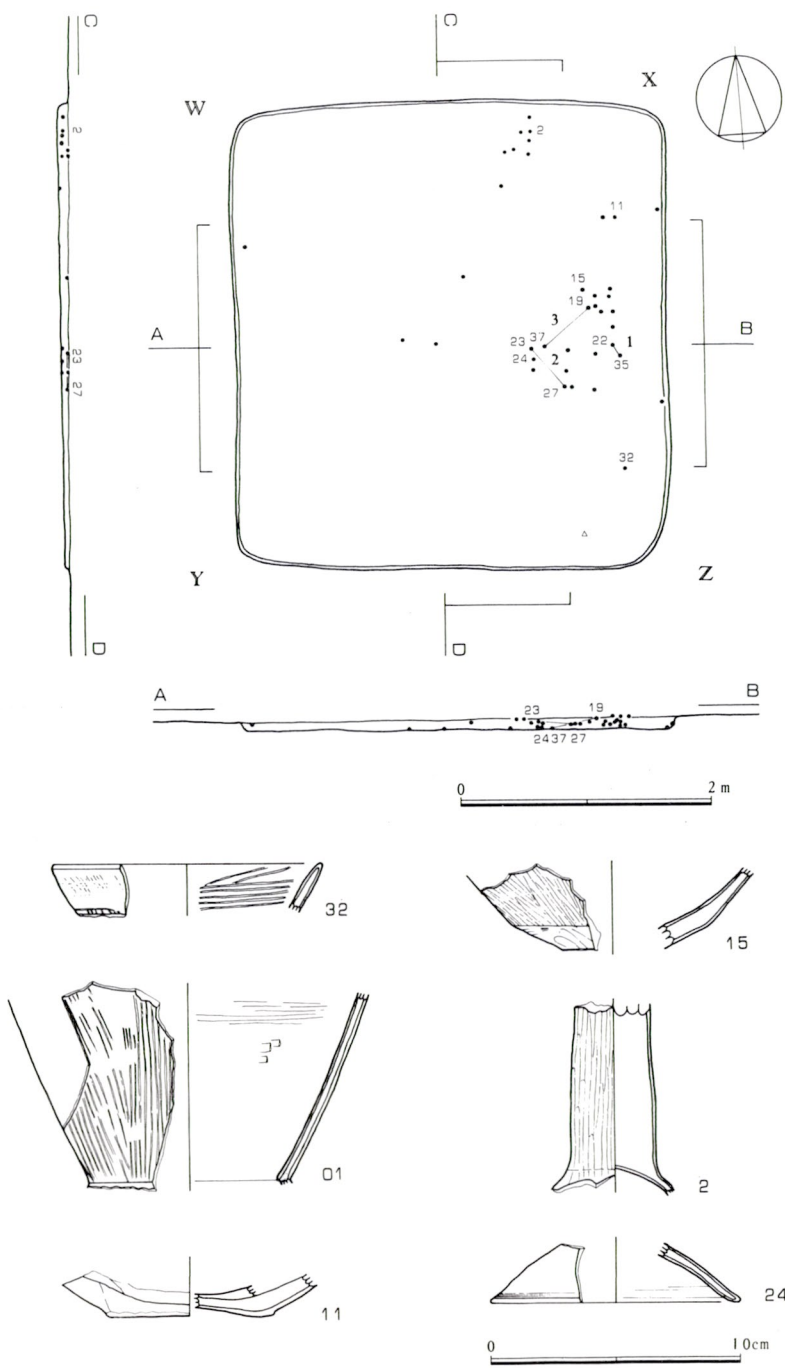
ピット・炉址 両者ともに発見できなかった。

埋没土 ローム粒子を僅かに含んだ黒色土で、人為的に埋め戻された土砂である。

遺物の出土状態 竪穴の西半部は僅かに数点の破片が発見された程度で、主として東側のA-Bセクション付近に20数個が集中的に散在する。この範囲内の接合資料3例は、それぞれ方向を異にして接合し、相互の接合距離は50cm以内である。このような接合資料を含むドットのありかたを観察すると、投棄実験例と符合する点が多い。ここに散在した破片類は、東側の壁外からほとんど一括的に棄てられたと考えてよい。

接合資料は3例抽出でき、2例は未接合の同一個体である。

接合資料1<甕形土器>23▽6・27△4



第一七图 第一二号住居址・出土遺物実測図

接合資料 2 < 埴形土器 > 22▽10・35▽10
接合資料 3 < 同 > 19△8・37△0 } 同一固体

遺物の概要 出土遺物は土師器と自然石である。土師器は、ほとんどすべて小破片で出土し、辛うじて6列（確認面1例を加える）の破片が実測できた。

壺形土器 32は外傾する口縁部の破片で、小型の壺形土器であろう。器面に刷毛目痕を残す。11は壺または甕形土器の底部破片である。

埴形土器 確認面出土の01と接合資料2・3の口縁部が該当する。大型の器種で口縁部と胴部を欠損している。器面は平滑であって、細かい刷毛目工具により調整される。

高坏形土器 坏部、脚部と裾部の破片が存在するが、別個体の資料である。15は底部から斜め外方に口縁部が開く。外面は篋による調整が入念に施される。脚部2は棒状を呈し、縦位に篋なでを行っている。24は幾分内湾しながら八の字状に開く裾部である。外面は平滑に調整されているが、内面はやや粗雑になる。

7 第一四号住居址（第一八・一九図，図版第一〇・一一・二一）

規 模 北壁と南壁は同じ長さで約5.4m，西壁と東壁も同様に約4.5mを測る。面積約24㎡。形状は長方形である。確認面からの壁高は約30cmで、ほとんど垂直に掘り込まれている。

床 面 南壁と東壁寄りが硬度3，中央付近から西壁一帯が硬度2～3に相当する。

ピット・炉址 柱穴は存在しない。炉址は北壁近くの中央にあり、長径約86cm，短径約30～40cm，深さ約12cmの地床炉である。焼土の範囲と堆積状態から燃烧部は南側と思われる。

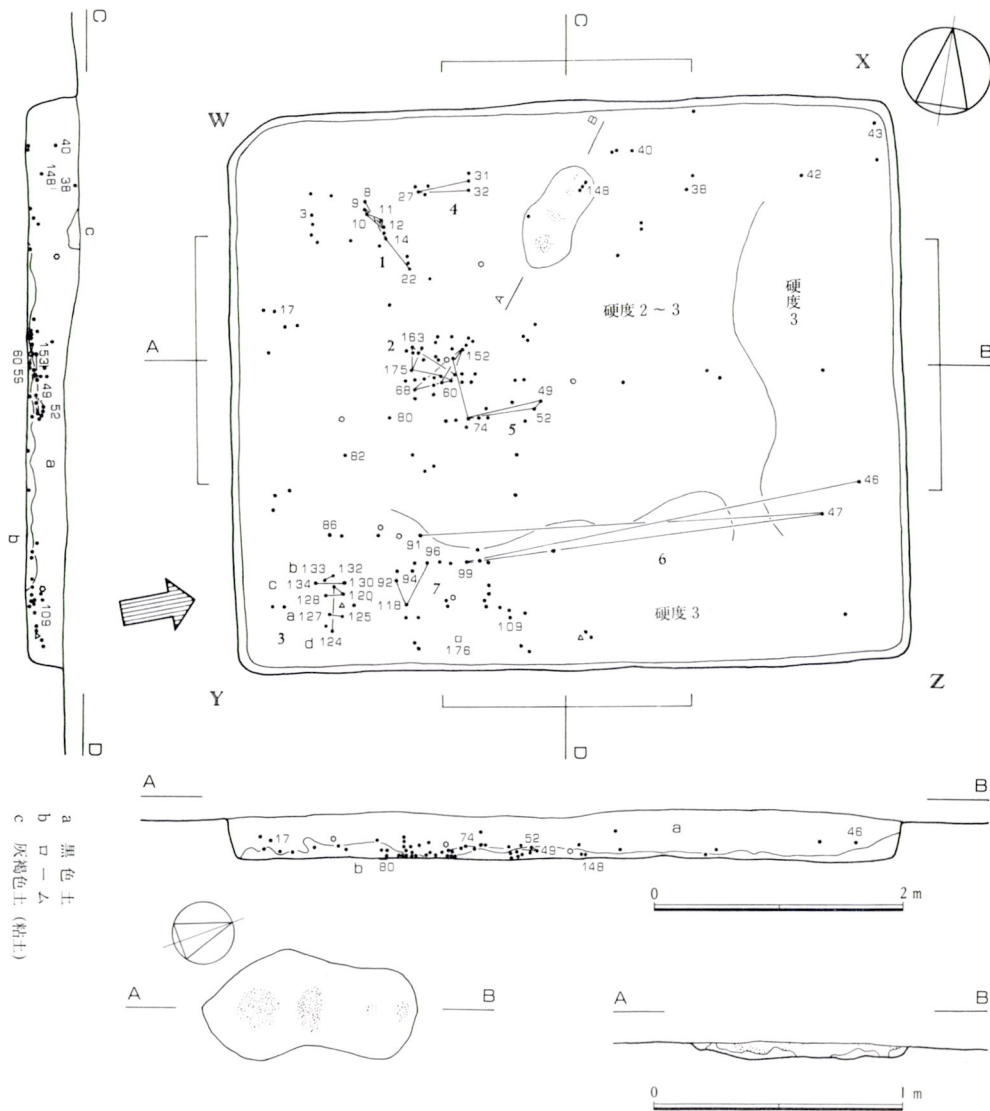
遺物の出土状態 中央から東側の空間は、非常にまばらであって、西側の床面上に多くの遺物が存在する。特に炉址の西側，南西側，Yコーナー付近の3か所が顕著である。ドット・マップとその接合線のありかたは、主として西壁方向から遺物を投棄した事象を物語っており、各グループはほとんど同時的に一括廃棄されたものと考えてもよい。

接合資料は、甕形土器に4例（他に同一個体3例）と壺形土器に2例を抽出できた。

遺物の概要 出土遺物は、土師器、石製品（管玉）、使用痕のある自然石（礫器）、自然石、混入遺物としては中期縄文土器片などがある。

土師器の器種は、甕形土器、壺形土器、埴形土器、高坏形土器、手づくね土器などに分かれる。

甕形土器 接合資料1は、口縁部がくの字状に屈曲して斜め外方に立ち上がり、大きくふくらむ胴部は、丸底気味の底部に移行する。頸部から胴部に刷毛目調整、底部は篋なでを施す。接合資料2は口縁部から肩部の破片である。単口縁の形状は、頸部から立ち上がって外反する。口縁部に横なで、胴部に刷毛目調整を行っている。小型甕138は、口縁部をくの字状に外反させ、胴部最大径を下方におく。口縁部と頸部はなでを入念に施し、胴部は刷毛目と篋なでを併用して調



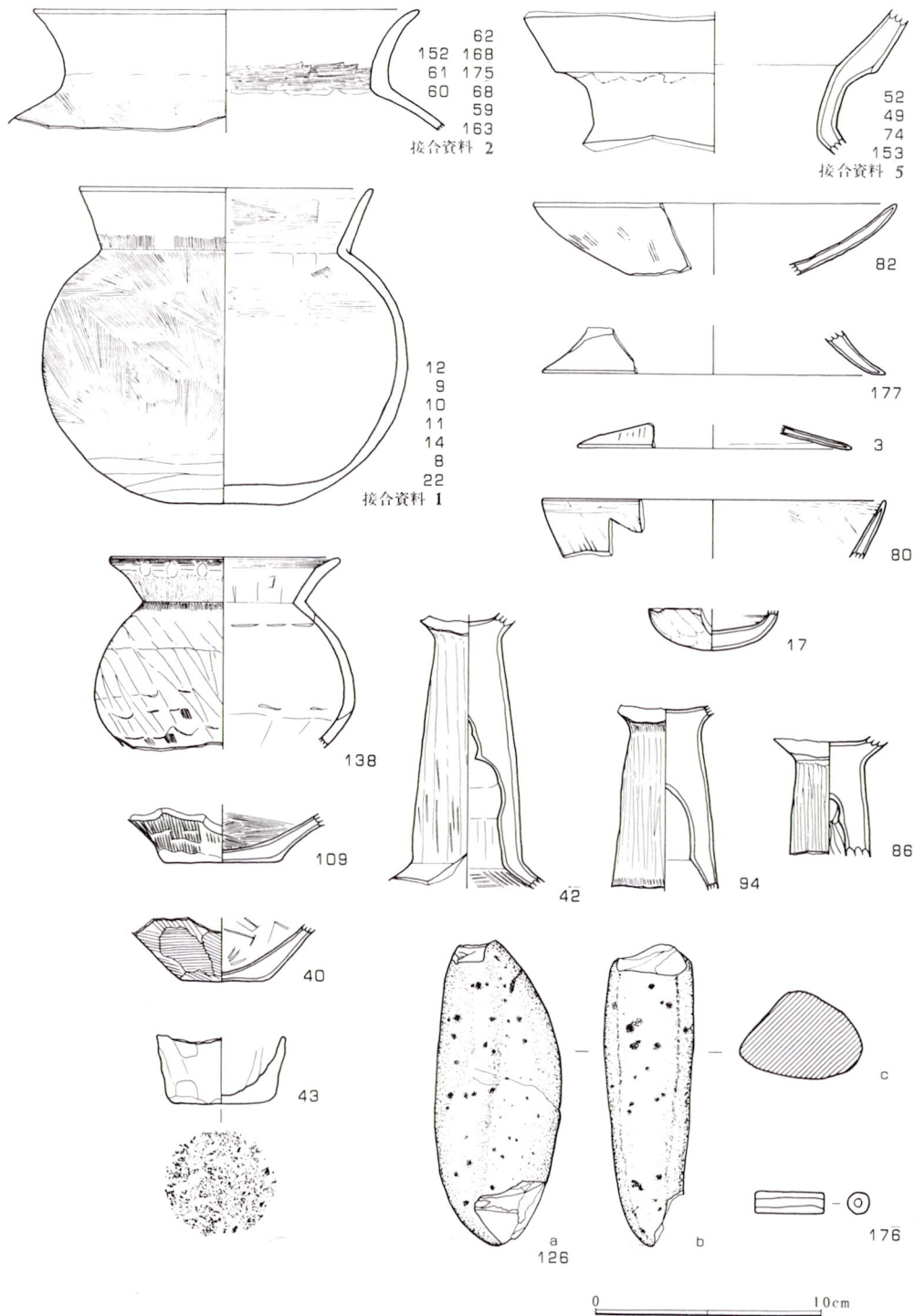
第一八図 第一四号住居址実測図

整するが、一部に輪積痕も残る。底部破片の109・40の2例は、刷毛状工具により整形される。

壺形土器 有段口縁壺の接合資料5は、外反する頸部からさらに口縁部が内湾気味に開く。器面は全体に磨滅している部分が多い。

埴形土器 80は斜め外方に立ち上がる口縁部で、篋磨きを施し、赤彩された小破片もある。17は胴部の破片である。

高环形土器 口縁部、脚部、裾部の破片が存在する。82は内湾しながら開く口縁部で、一部に刷毛目痕を残す。42・94・86の3例は脚部であり、器形は下方に移行するにしたがいふくらみ、



第一九图 第一四号住居址出土遺物実測图

内部は中空となる。裾部 177 は外反して開き、3 はほとんど外反せずに開くように思われる。

手づくね土器 43 は口径 5.5 cm、高さ 3 cm の大きさを有する。器の内外面に指頭痕を残し粗雑につくられている。底面は無文である。

管 玉 176 長さ 30 mm、直径 10 mm、中央に径 3 mm の貫通孔（両側穿孔）を有する。完形品。重量 5 g。那珂川上流産の珪岩を加工したものと思われる。

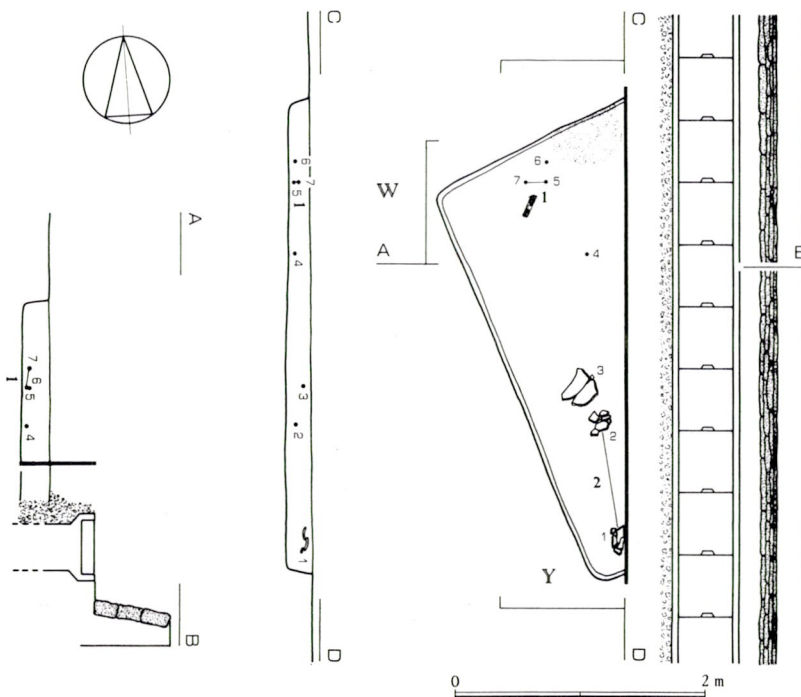
礫 器 126 現存長 135 mm、最大幅 55 mm、厚さ 40 mm、重量 400 g を計測する。上下の両先端部に打欠痕を残す。この手の大きさは長味のある自然石（安山岩）で、手中に握りしめるに適している。重量的にもたたいたり、うちくたく機能をも十分に果たすことができる。

8 第一五号住居址（第二〇・二一図、図版第二一）

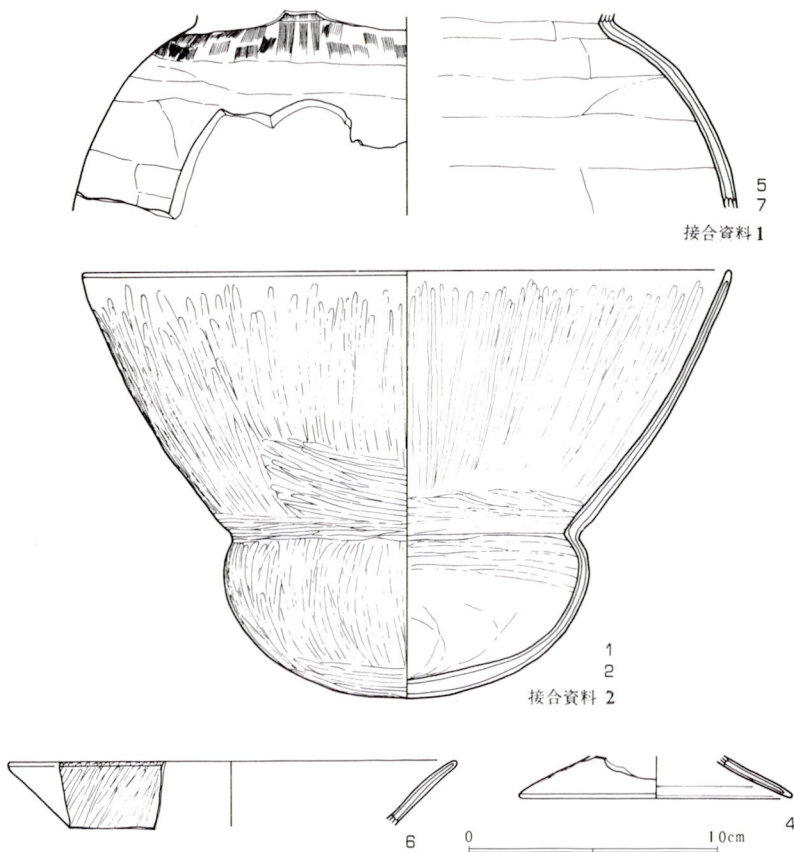
規 模 本址は、東側約 70% が道路の側溝と公園の敷地内に存在し、発掘できた範囲は僅かに西側の部分であった。西壁（W-Y 間）は約 3.4 m を有する。他の壁辺長は未発掘のため不明である。形状は方形か長方形かのいずれかと思われる。壁高は約 20 cm を測る。

床 面 発掘範囲が外区に相当する部分なので硬度は 2～3 に比定される。

ピット・炉址 柱穴の P₁ は発見されてもよさそうであるが、ついに検出できなかった。炉址



第二〇図 第一五号住居址実測図



第二一図 第一五号住居址出土遺物実測図

はおそらく未発掘のところであろう。

埋没土 土砂は僅かにローム粒子を含んだ黒色土である。北壁に近い床面上には、厚さ5cm前後のロームが堆積していた。

遺物の概要 出土遺物は、土師器の破片が7個であって、床上5～15cmのレベル内に存在していた。このうち1と2，5と7はいずれも接合する。

土師器の機種は、甕形土器，埴形土器，高环形土器などである。

甕形土器 接合資料1は、口縁部と胴下部を欠損する。胴部上半の破片は、球状を描いてカーブし、肩部外面に刷毛目調整痕を残す。3も同様に球状の胴部破片である。外面は斜めの篋整形を施し、内外は上半に篋、下半に刷毛目痕を残す。胴部中央に輪積み接合痕がみられる。

埴形土器 接合資料2は、丸底の底部から、屈曲して内湾しながら口縁部が立ち上がる。内外面とも入念な篋磨きを施している。

高环形土器 6は坏部の破片で口縁が弱く外反しながら開く。器面は入念に篋調整を施す。4

は裾部の破片で幾分内湾気味に開いている。

9 第一六号住居址（第二二・二三図，図版第一二・一三・二一・二二・二三）

規 模 北壁（W-X間）は約3.7m，南壁（Y-Z間）は約3.5m，西壁（W-Y間）は若干長く約4.1m，東壁（X-Z間）は短くなって約3.9mを測る。面積は約35cmを数える。壁面は崩落せずに良好な状態を保っている。

床 面 全体に平坦である。硬度3に比定できる部分は、炉址からZコーナーの床面で、細かい凹凸がみられる。炉址からWコーナーにかけては硬度2～3に相当し若干軟らかくなる。床面の下は、実測図に示すような貼床を施す。周溝は存在しない。

ピ ッ ト 柱穴に相当するピットは、東側の床面に2本発見され、西側にはなぜか検出できなかった。両柱穴の直径は25～30cm，深さはP₁が25cm，P₂が31cmである。P₃は本址に関係ない。

貯 蔵 穴 Zコーナーの近くにあり，長径120cm，短径110cm，深さ約60cmの規模を有する。形状は不整形を呈し，底面は平坦である。周囲には厚さ5cm前後の“土くそ”が堆積する。

炉 址 床面のほぼ中央に位置している。長径70cm，短径50cm，深さ約10cm。焼土は中央より南側に堆積する。床面下部のロームは練瓦状に焼けている。

埋 没 土 黒色土bと壁の近くに黒色土（ローム粒子混入）cが堆積し，中央付近の一部に攪乱aが認められる。土砂は明らかに人為的に埋め戻したものである。

遺物の出土状態 ドットで記録した平面分布は，炉址の西側に集中し，それより南側からP₂の付近にまで拡散する。周壁に沿った外区の空間には，極めてまばらに遺物が存在する程度である。A-Bセクションに幅2m範囲内のドットを投影してみると，大部分のドットは床面上に重畳するかのような出土状態を示し，それより上方の覆土中にはほとんど包含されていない。この状態はまさに廃棄の同時性を示す好例として理解できる。

接合資料は，同一個体間で接合するものを含めて，7例が抽出できた。接合方向は南-北，東-西，北西-東南を指向する事例に分けられる。接合線のありかたと投棄実験例を参考にすると，北西側から廃棄した可能性が強いと思う。

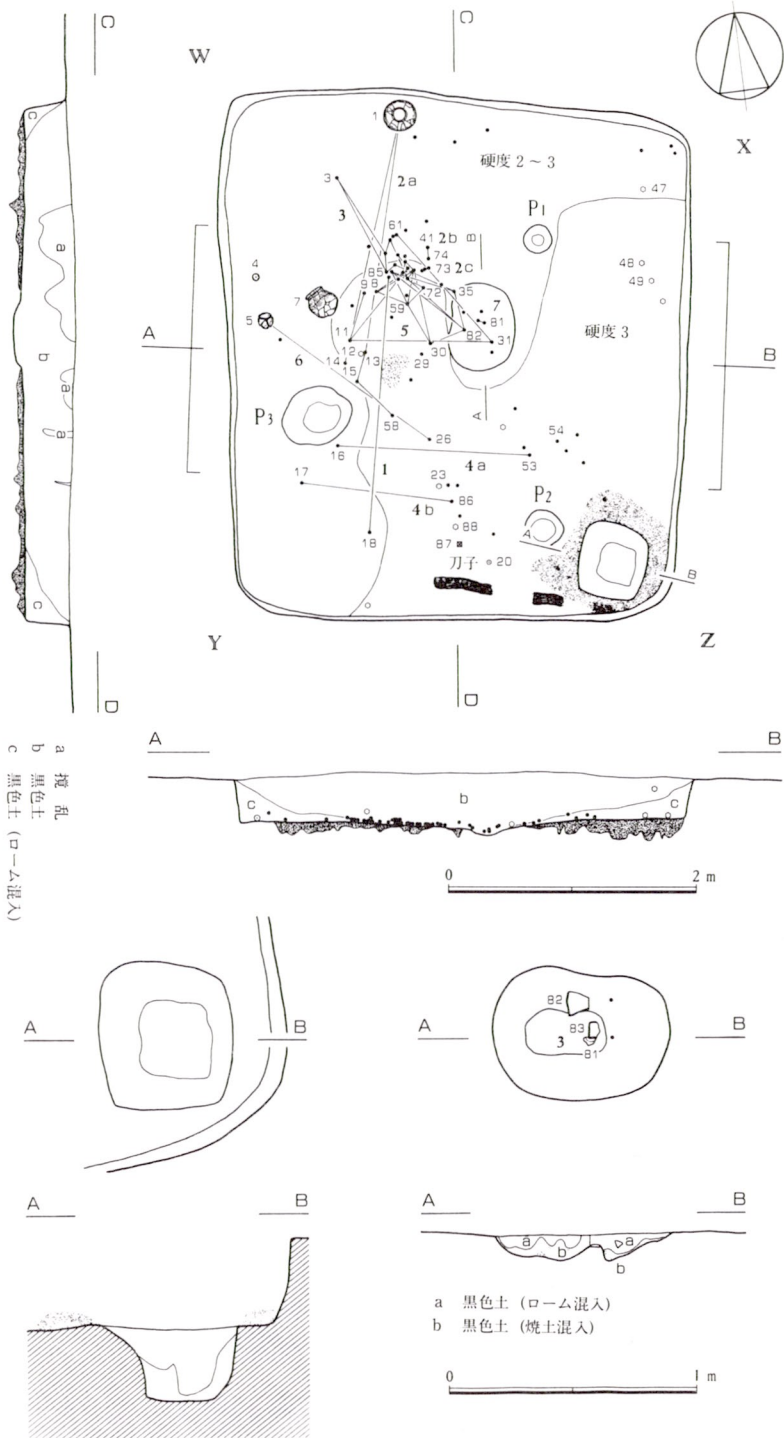
土器破片の表裏関係は，表41個（49%）+裏38個（45%）+立ち5個（6%）=84個（100%）という比率になる。

接合資料の器種別内訳は，甕形土器1例，壺形土器3例，埴形土器1例，高坏形土器2例である。

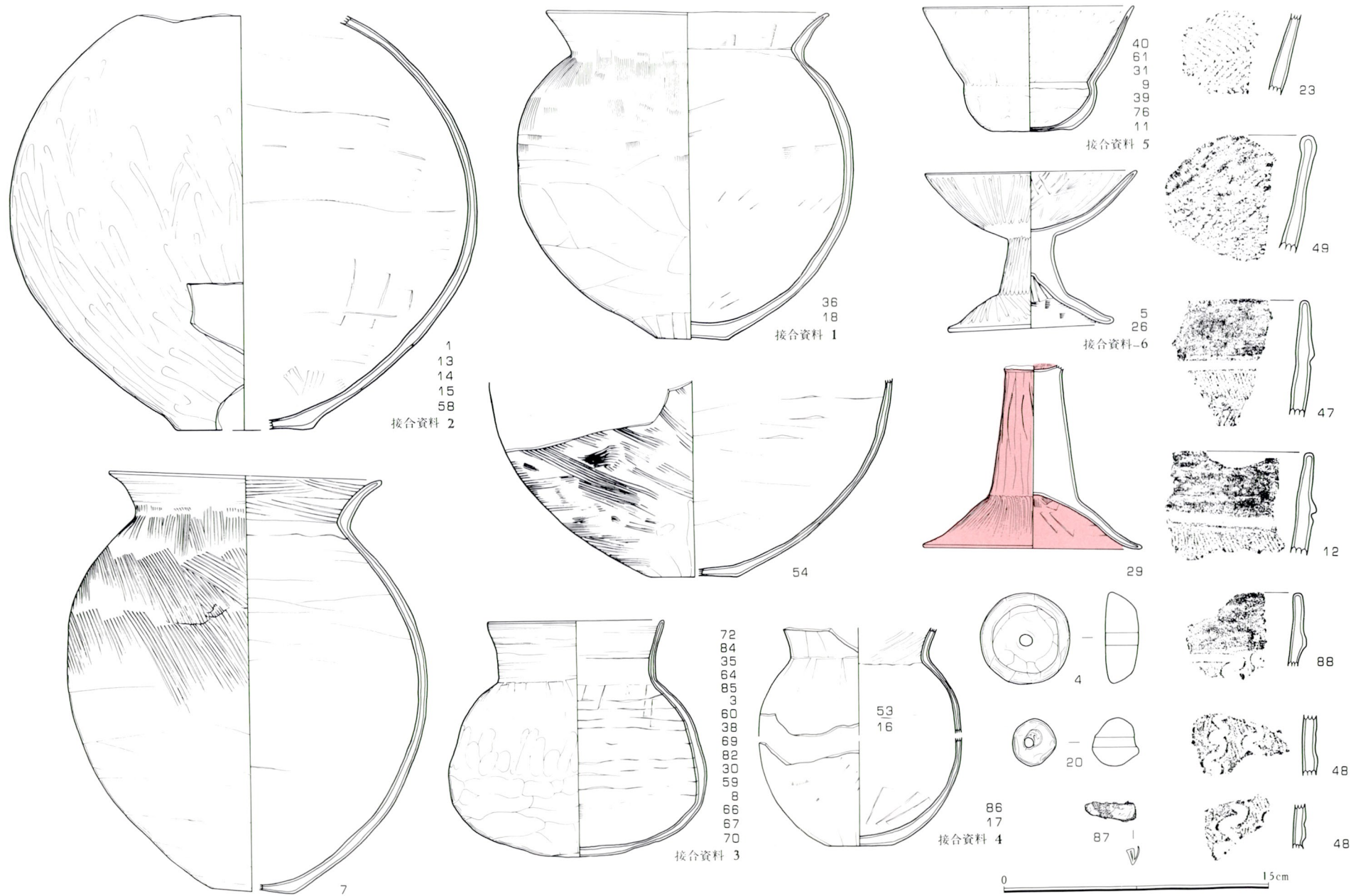
接合資料1〈甕形土器〉18▽7・36△3

接合資料2〈壺形土器〉1▽0・13▽0・14▽0・15△0・16▽2……41▽0・74▽0……73▽0・77▽0

接合資料3〈 同 〉72▽0・84△3・35△4・64▽0・85▽3・3△0・82△0・30△



第二二图 第一六号住居址实测图



第二三图 第一六号住居址出土遗物实测图

2・59△0・8▽0・66▽0・67▽0・70▽0・60△0・38△3

接合資料4〈壺形土器〉16▽2・53△3……17▽3・86△3

接合資料5〈埴形土器〉40▷0・61▽0・31△0・9▽0・39▷3・76▽0・11▽0

接合資料6〈高坏形土器〉5△6・26△0

接合資料7〈 同 〉81△0・83△0

遺物の概要 出土遺物の総数は87個を数える。内訳は土師器破片76個、紡錘車1個、球状土製品1個、鉄製品残片1個と縄文土器破片8個（確認面を加えると10数個となる）に分けられる。縄文土器は、前期前半の花積下層式、後期前半の綱取式に比定できる混入遺物である。土師器は、甕形土器、壺形土器、埴形土器、高坏形土器などの器種を含んでいる。

甕形土器 接合資料1は、単口縁の甕で頸部からくの字状に外反し、胴部は球状にふくらんで底部に移行する。54の胴部も類似した器形である。外面の調整には刷毛目と篋が併用される。7の口縁部は頸部からくの字に外反し、胴部のふくらみは接合資料1よりやや弱く、長胴気味に底部へ移行する。口縁部は外面になで、内面に刷毛目を施す。胴部上半は斜めの刷毛目、下半は篋による調整痕を残している。

壺形土器 接合資料2は大型の土器で口頸部を欠失する。胴部は外方に大きく張りだし最大径を中位におく。底部は僅かに突出する。器面には斜めの篋なでが入念に行われる。胎土、焼成は良好である。接合資料3は、口縁部が直立気味に立ち上がって僅かに外反する。胴部は下方が大きくふくらみ、底部が丸底状に近くなる。口縁部を横なで、肩部を篋なで、胴部に粗い篋削りを施し、全体に整形は著しく粗雑である。接合資料4は、口縁端部を欠損するが、その立ち上がって開く具合は接合資料3の口縁部に近似する。胴部は上下の破片を実測し図上復元すると、球状を呈して移行する器形である。器面は篋磨きを丁寧に施している。

埴形土器 接合資料5は、小さい底部から口縁部が斜め外方に開く。全体に篋磨きを行い器面は平滑である。頸部内面に稜を有する。

高坏形土器 接合資料6は完形品である。坏部は底部からゆるやかに内湾して外方に開き、底部と口縁部の境に稜を形成しない。脚部は柱状にのびず短い。裾部はハの字状に開く。器面の調整は篋磨きを入念に行っている。内外面に赤彩が残る。29は坏部欠損の資料で、脚柱が長くのび、裾部は幾分内湾気味に開く。器面は篋磨きにより平滑である。

紡錘車 4は直径50mm、厚さ20mm、中央孔6mmの大ききで台形を呈する。整形は篋削りによる。土製品で重量は46gである。

球状土製品 大ききは20～25mmの扁球形を呈し、中央に径5mmの貫通孔を有する。重量16g。

鉄製品 現存長30mm、最大幅10mmを測る。下端に刃部が作出されており、おそらく刀子の先端部破片であろう。

第五章 歴史時代の住居址と出土遺物

歴史時代の住居址は、調査区の南端西側、中間部分の東側に接して2軒検出された。第六・一三号住居址が該当する。いずれも住居址の一部または大半が調査区外に存在し未完掘である。

1 第六号住居址（第二四・二五図、図版第一四・一七）

規 模 西側約60％は調査区外の畑地に存在する。発掘した空間は北壁（W-X間）約3.6m、東壁（X-Z間）約2.7mを結ぶ範囲である。北壁のカマドが中央から僅かに東寄りの位置にあり、方形住居と考えれば一辺3.7m程度の大きさになろう。壁高は確認面から30～35cmを測る。

床 面 カマド前面から中央部にかけては、凹凸のある硬度3、外区は硬度2に相当する。

ピ ッ ト 柱穴はXコーナーの内側1.2mの床面にP₂（直径25cm、深さ約70cm）が存在する。

カ マ ド 構築位置は、北壁中央から僅かに東に寄る。煙道部は壁外に掘り込み、両袖部を褐色の砂質粘土で積み重ねている。断面形は、焚口部から燃焼部にかけて浅く掘りくぼめ、煙道部に至って舟の舳先状に立ち上がる。煙道部から焚口部間約70cm。燃焼部幅約30cm。

埋 没 土 図示したような層相を呈し、黒褐色土、黒色土、ロームなどが堆積する。人為的に埋め戻した土砂であることは明らかである。

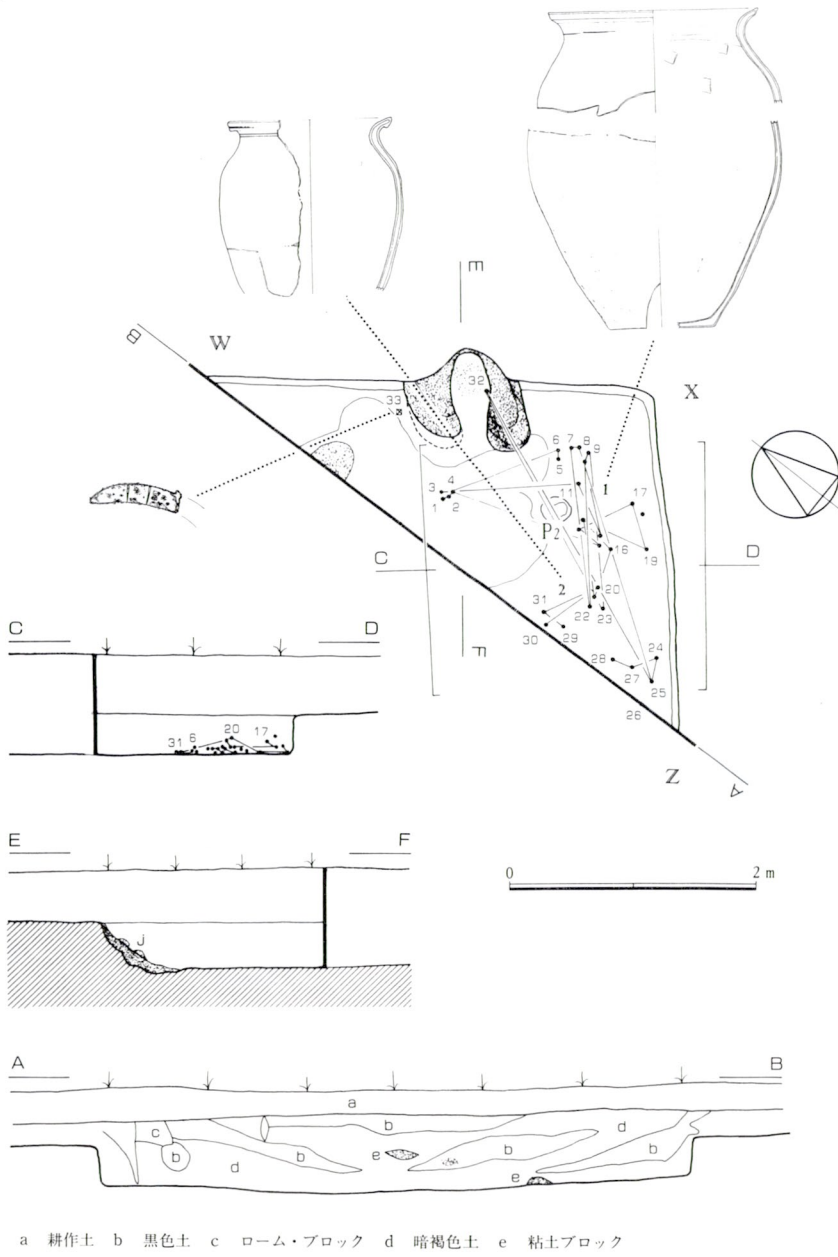
遺物の出土状態 発掘した範囲は、住居址の東側、Xコーナー寄りの約40％程度である。出土遺物の大部分は、接合資料1と2の甕形土器に属する破片である。両者はC-Dセクションに投影すると、床面上から15cmの範囲内に散在し互いに接合している。接合関係図をみれば、2例の土器は、破片の状態で一括棄てられたことがわかる。鉄鎌はカマド左袖部外縁の床面から発見された。

遺物の概要 本址の遺物は、土師器、鉄製品と砥石であって、この他に34・35・36の複合口縁の壺形土器、小型の壺形土器、縄文後期堀之内式土器片（拓影図省略）などが出土している。後者は明らかに混入した遺物とみなされる。

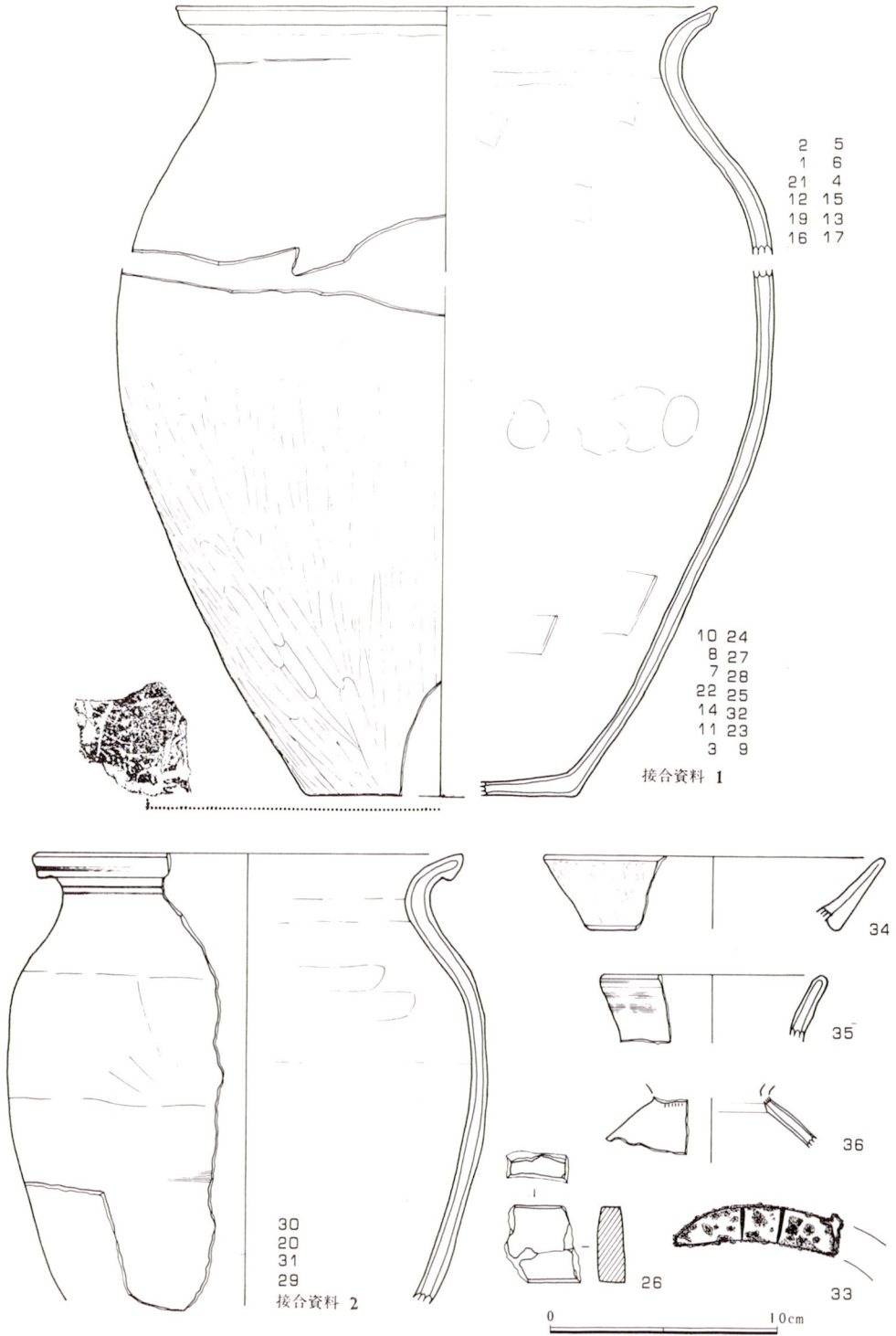
甕形土器 接合資料1は、頸部から外反して口縁部に至り、口唇部先端が細くなる。胴部の最大径を肩部におき、ゆるやかに底部へ移行する。底面に木葉痕を残す。胴部の器面調整には、縦方向の篋などが顕著に認められる。接合資料2は、頸部から口縁部が短く外反し、口縁端部に幅1.2cmの縁帯を形成する。胴部の最大径は肩部にある。器面に煤が付着し、胴下部は全面に剥落痕がみられる。

鉄製品33 刃部が内湾する鎌である。現存長70mm、刃部幅15mm、厚さ0.2mm、基部を欠損する。

砥石 26 現存長約30mm、幅約34mm、厚さ12mmの残片である。使用痕は両面に残る。珪岩質製。



第二四図 第六号住居址実測図



第二五图 第六号住居址出土遗物实测图

2 第一三号住居址（第二六・二七・二八図，図版第一五・一六・二一・二二・二三）

規 模 Xコーナー部分は，道路の側溝内に入るため未発掘である．北壁（W-X間）推定4.8m，南壁（Y-Z間）約4.3m，西壁（W-Y間）約4.5m，東壁（X-Z間）推定4.3m不整形を呈し，面積は約22㎡前後である．壁高は50～55cmを測る．壁面は垂直に近く掘り込んでいるが，壁際の床面には崩落したロームは存在しない．

床 面 平坦な床面で全体に硬度3に相当する．床面の下には厚さ10cm前後の貼床を施す．

ピ ッ ト 各コーナーの対角線上約1mの地点に存在し，直径と深さから支柱穴と考えられる．各柱穴は半截発掘を実施した．P₁とP₂を図示したのでそれについて説明する．P₁は直径75cm，深さ73cmを測る．埋没土は，a 黒色土，b 黒色土（ローム粒子とブロック混入），c 黒褐色土，e 突き固めた褐色土の4層に区分でき，柱材を抜き取った後に埋め戻した土砂である．P₂は直径約40cm，深さ50cmでP₁より規模が劣る．埋没土は，c 黒褐色土，d 褐色土，e 突き固めた黒褐色土に区分され，eは柱を抜き取った後に埋め戻している．さらにカマド右袖部は砂質粘土が流出して，柱穴上面を被覆している状態が読みとれる．

カ マ ド 残存状態は，両袖部の砂質粘土がP₂の断面図からも知られるように，かなりの部分が崩落または流出しているようである．奥壁の煙道部から焚口部間160cm，燃焼部幅約50cm，焚口部約40cm程の大きさを有する．断面図からみた煙道部の立ち上がりは，カマド本来の機能を備えているが，燃焼部にはほとんど掘り込んだ跡がみられない．

埋 没 土 土壌はすべて黒色土を呈する．混入する物質によって細別が可能である．ロームを粒子状に含むものをa，ローム粒子とブロックを混入するものをb，ローム粒子を含まない黒色土をcと区別した．dは同一層中に介在するロームのブロックである．埋没土は埋め戻しによって人為に堆積した層序である．

遺物の出土状態 総数135個の遺物は，ドット・マップをみると，P₁からP₂とP₃を結ぶ空間に大部分の遺物が存在する．この平面分布のうちA-Bセクションを中心に，南北両側1m幅で投影すると，b層内に収まる遺物が多く，上半部のa層には数えるほどの遺物しか散在しない．接合資料のありかたは，おおむね南-北方向を軸として拡散する傾向が認められ，その事象は同時に廃棄の方向性を示唆するものであろう．

接合資料は，土師器に8例（1～8），須恵器に3例（9～11）の合計11例が抽出できた．

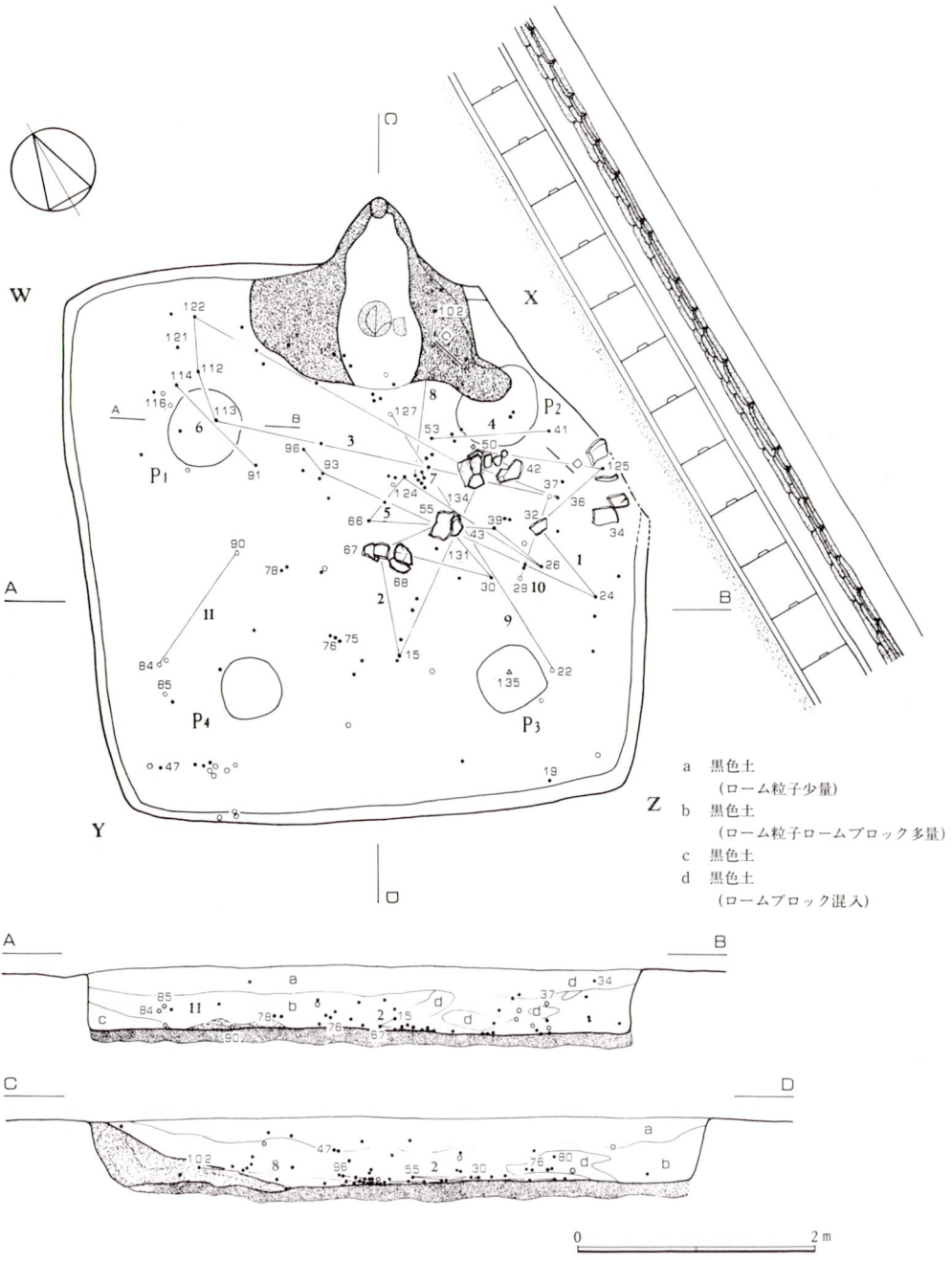
接合資料1 < 甕形土器 > 24▽10・32△3・125▷0・50▽2・42▽2・93▷4・96△8

接合資料2 < 同 > 68▽2・30△2・55△5・67▽2・43▽3・15△10

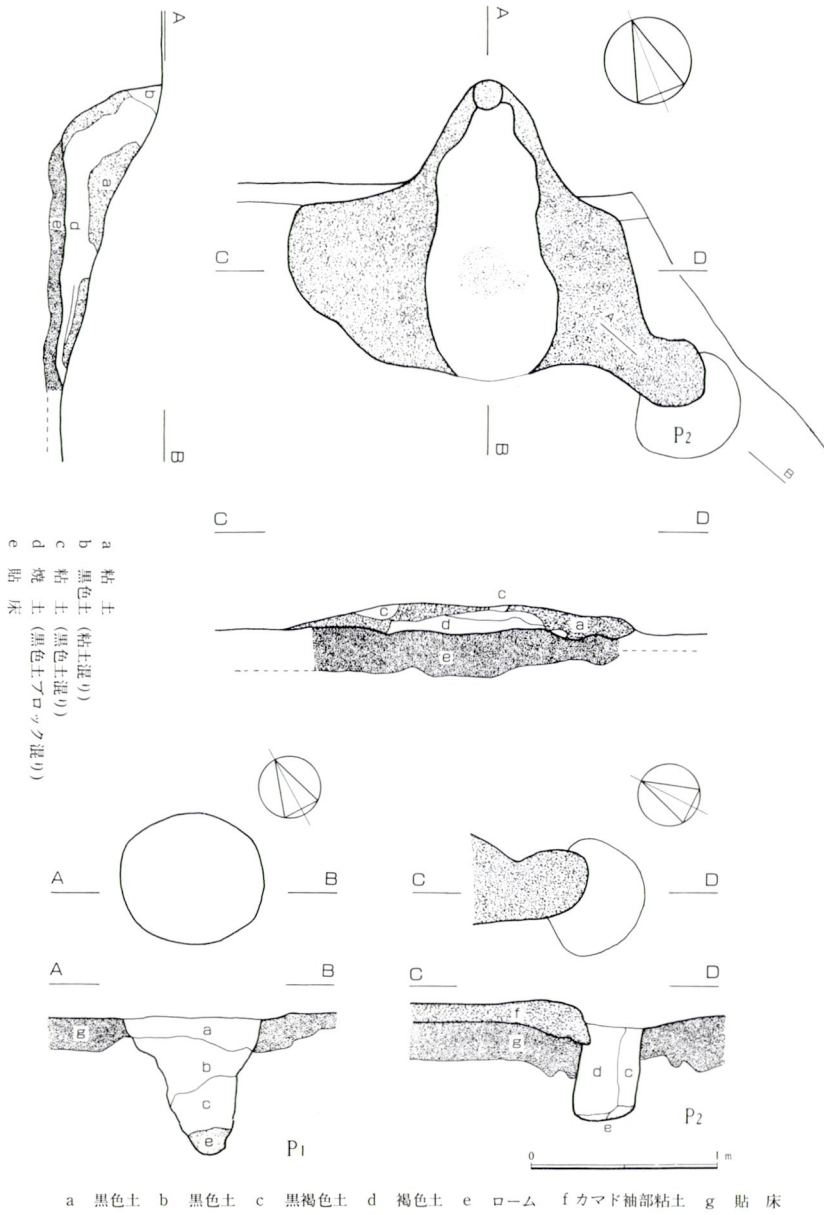
接合資料3 < コシキ形土器 > 122▽13・112△14・113△6・36△12・44△3

接合資料4 < 同 > 41△16・53△30

接合資料5 < 同 > 39▽0・66▽2・124▽0・26▽0



第二六図 第一三号住居址実測図



第二七図 第一三号住居址カマド・柱穴実測図

接合資料6〈胴部破片〉91△18・114△20

接合資料7〈 同 〉58▽0・61▽0

接合資料8〈 同 〉59▽0・

接合資料9〈坏形土器〉127▽0・22▽5

接合資料10〈蓋形土器〉29△13・37△26

接合資料11〈 同 〉84△15・90▽0

遺物の概要 遺物の内訳は、土師器106個、須恵器15個、縄文土器13個、石製品1個に分けられる。本址に属する土師器の器種は、甕形土器、コシキ形土器、須恵器では坏形土器と蓋形土器がある。なお、有段口縁の壺形土器19、高坏形土器131、134、47と縄文土器（堀之内式期）は、年代の異なる土器で明らかに混入した遺物とみなされる。

甕形土器 接合資料1と2は底部を欠失する。2例ともほぼ同様な器形で、頸部から口縁部が外反し、口唇部が細く立ち上がる。胴部の最大径は上半にあって、口径より若干大きくなる。器の上半部になで、下半部に縦位の筥なでを施す。75は口唇の縁帯部に細い溝が入る。121は小型の甕で底部を欠損する。器面には斜めの粗い筥削りが行われる。

コシキ形土器 無底式の底部破片が2例存在する。

坏形土器 85は破片で器形の詳細は不明である。接合資料8は、底部から体部が斜めに立ち上がって口縁部に至る。ロクロ回転で製作し、切り離しを回転筥切りで行っている。

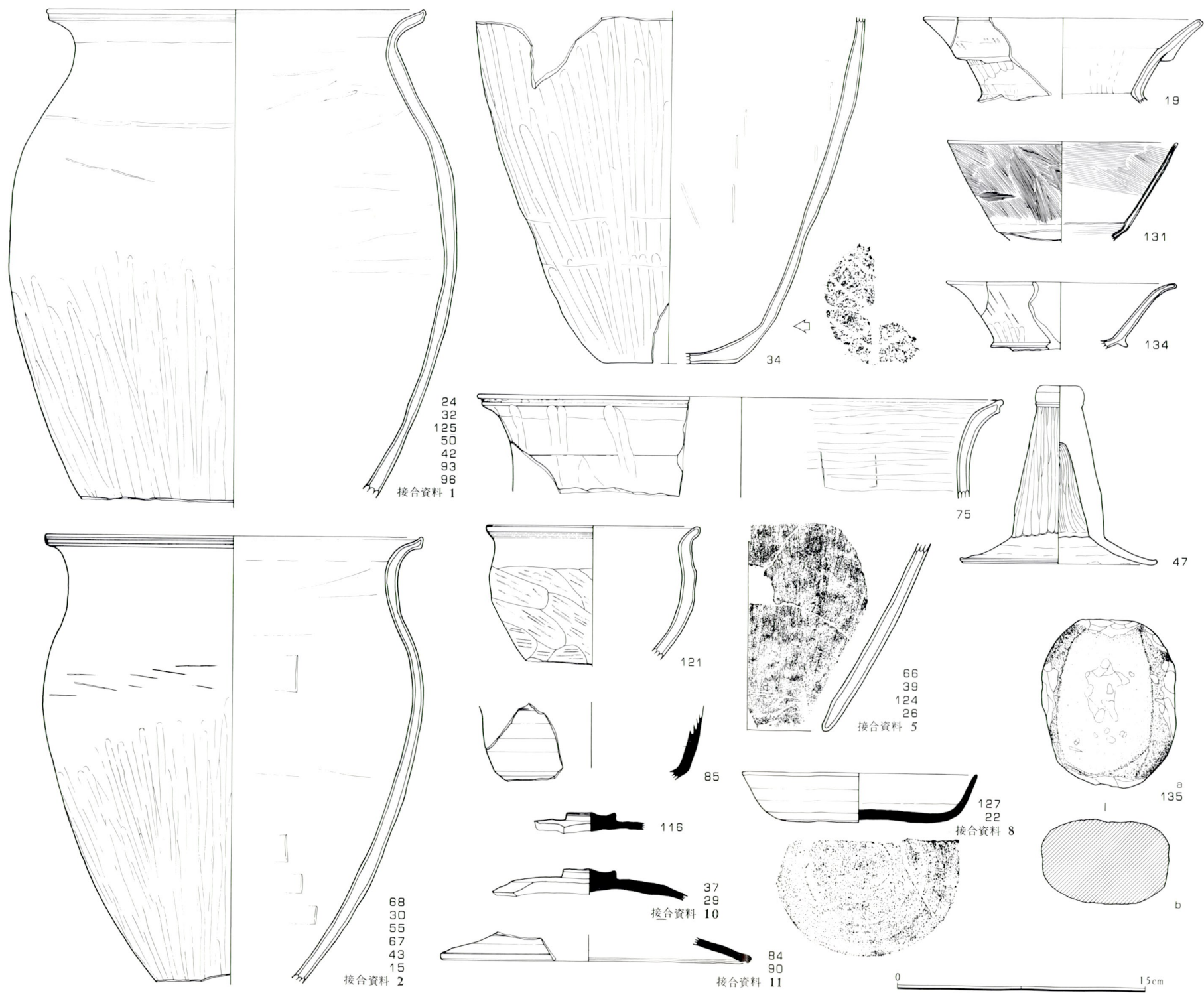
蓋形土器 116と接合資料10は鈕を伴った破片である。2例とも環状を呈する鈕で、鈕中央の高まりは外周とほとんど同じである。接合資料11は口縁部の破片で、端部を下方へ折りまげただけで内面にかえりを作出しない。

壺形土器 19は口頸部の破片である。頸部がくの字状に外反し、口縁部に段を有する有段口縁の壺となる。外面は筥により平滑に調整されている。

高坏形土器 坏部の131は、底部から内湾気味に外方に開く。内外面ともに刷毛目によって調整される。134の坏部は、底部が外側に突出し、口縁部は斜めに開いて外反する。47の脚部は、柱状部が下ふくらみとなり、強く外側に屈曲して裾部を形成する。器面の調整は筥による。前期の和泉式期の特徴を備えている。

縄文土器 記録した13個の破片は、胎土、焼成、色調などからすべて同一個体と思われる。縄文地に太い条線文を有する深鉢形土器で、大洗町大貫落神貝塚の第II群土器（堀之内I式）に該当する（藤本弥城「大貫落神貝塚」『那珂川下流の石器時代研究』II 昭和55年12月）。

石製品 隅丸長方形を呈し、長さ10.0m、最大幅8.0cm、厚さ5.3cmの大きさである。実測図の上下両端、左右中央、両側面の中央に打滅痕がある。重量640g。砂岩。



第二八图 第一三号住居址出土遺物実測图

第六章 ま と め

大串遺跡の第二次調査（昭和63年—平成元年）に引き続き実施した今回の発掘概要と成果（第三次調査）は、以上に記述してきたとおりの内容である。

大串貝塚ふれあい公園内のL・E・Cセンターを中心とした第二次調査時の遺構は、古墳時代前期の竪穴住居址が5軒発見された。今回の隣接する市道常澄8-1495号線内においては、前回と同様の住居址が9軒出土し、当初予想しなかった古墳時代後期以降の住居址2軒があらたに確認できた。この遺構分布の状況からは、本地区の南西側になお多くの住居址群が存在し、古墳時代前期を中心とした4世紀後半代の集落が形成されていることは明確であり、あらためて本遺跡の考古学的重要性を指摘できるのである。

ここ大串の地は、縄文前期の古い時代から大規模な地点貝塚が形成され、弥生時代の集落は未発見であるが、古墳時代に移行すると前期の集落、続いて後期の集落が存在し、首長層の古墳も周辺に築造されている（『水戸市北屋敷古墳』平成6年12月刊行予定）。さらに律令制下の奈良・平安時代にも多くの人びとが居住し、中世・近代をへて現在に及んで営みを続けている（『常澄村史』通史編 平成元年8月）。先史・古代から長期にわたって人びとの生活を支えてきた基盤は、この台地をはじめ那珂川と涸沼川が形成した沖積低地（食糧資源の獲得に適した自然環境）を擁していたからに他ならない。

といっても4世紀から5世紀代にかけて、現在のような灌漑施設の整備された立派な水田や畑地が展開していたわけではない。ちなみに、本遺跡の北西約2~3km付近を蛇行東流する那珂川の右岸には、南側の水田より若干地盤高度の高くなる微高地（標高5m前後の自然堤防）が形成されている。川筋の中大野、坏大野、東大野や西大野の地が該当する。この坏大野と西大野には、古墳時代前期（五領式）から中期（和泉式）の遺跡が存在し、遺構の詳細は不明な点もあるが、甕形土器、壺形土器、埴形土器、鉢形土器、高坏形土器、器台形土器などが出土している。生活用具としての土器類が出土する場所は、そこに該期の集落が存在したことを示唆するものである（『茨城県の土師器集成』第1集 昭和42年3月）。この微高地の南西側一帯から大串台地にかけては、狭小な支谷間の谷津とは別に、肥沃な土壌をもつ水田可耕低地が展開していた。食糧資源の獲得に適した自然環境の形成は、まずこうした土地の開田作業から始めなければならない。両遺跡の集落は、そうした農業生産に従事した人びとの遺跡、多分に農業生産を拡大させるための開拓拠点的な性格を帯びた遺跡であったと思われる。そして、それはほぼ現在の集落分布の先駆的な状況を示していたといえるのではなからうか。また一方においては、河川の魚介類（フナ・ウナギ・スズキ・サケ・ヤマトシジミなど）捕獲も大きな魅力であったにちがいない。

大串の丘に占地し集落を構成した人びとは、坏大野や西大野遺跡の場合と同様に、そのほとんど

どが水田耕作のために沖積地への進出、あるいは畑作などの営農活動、または漁撈活動（第五号住居址出土の土鍾参照）に従事していたことが十分に考えられるのである。

一方、農業生産に従事していた大串遺跡の人びとにとっては、まつり〈祭祀〉も重要な生活の一要素を占めていた。すなわち、第一号住居址に珪岩製の管玉2個、第二号住居址に管玉1個、第九号住居址に管玉1個と手づくね土器、第一一号住居址に管玉3個と手づくね土器、第一四号住居址に管玉1個と手づくね土器が出土している。第二・三次調査を合せて16軒の住居址を発掘した。このうちの5軒の住居址から大小8個の管玉、手づくね土器、さらには高環形土器（赤彩土器を含む）などが発見された。これらはあらためて説明するまでもなく、祭祀行為に関係のある遺物と考えられる。

近隣の遺跡では、昭和63年に調査した那珂湊市山崎遺跡の古墳時代前期住居址27軒中、10軒の住居址において高環形土器や壺形土器などに、赤彩を施す事例が認められ、管玉も1個だけ出土している（『那珂湊市部田野山崎遺跡』平成2年3月）。また、平成4年から5年に調査した鷹ノ巣遺跡では、古墳時代前期住居址17軒中、過半数の10軒で高環形土器、壺形土器、埴形土器などを赤彩し、管玉は未発見に終わったけれども、石製模造品（勾玉・有孔円板）を出土した住居址が1軒存在した（『那珂湊市鷹ノ巣遺跡』平成6年3月）。

ここで本遺跡と鷹ノ巣遺跡の祭祀関係遺物の種類を比較すると、本遺跡の場合は、管玉と赤彩土器と手づくね土器、鷹ノ巣遺跡にあっては、石製模造品と赤彩土器という組みあわせになるかと思う。山崎遺跡の新しい調査内容は、教育財団が道路建設地内を発掘中であり、詳細はまだ公表されていない。私たちの発掘では、すでに管玉が出土していることから、おそらく前者の仲間に入るかもしれない。

以上のようにみえてくると、本集落内においては、数軒を一つのグループとした屋内祭祀、その中心となった祭祀具は管玉であって、赤彩土器や手づくね土器が併用され、個別的に豊穰、豊漁の祈り、あるいは感謝の祭りを執行していた生活の一面がうかがわれる。日常の生活用具“土器”をはじめとする各種の遺物を出土した大串遺跡は、常澄地域の古代史を解明する上で、きわめて資料的価値の高いものといえよう。

謝 辞

このたびの市道常澄8-1495号線の改良工事に伴う大串遺跡の発掘調査については、市建設課、市生涯学習課ならびに大串貝塚ふれあい公園L・E・Cセンター諸氏のご高配とご指導により、短期間に発掘調査と出土遺物の水洗、注記、接合復元、図面整理、実測図作成、報告書の執筆など、一連の困難な学術的作業を遂行することができた。ここに報告書が上梓されるにあたり、あらためて関係各位に深甚なる謝意を表するものである。（井上義安）

図 版



1 遺跡の遠景〈東から〉



2 遺跡の遠景〈南から〉



1 遺跡の近景〈南から〉



2 遺跡の近景〈南から〉



1 発掘調査の状況（第一一号住居址）〈南から〉



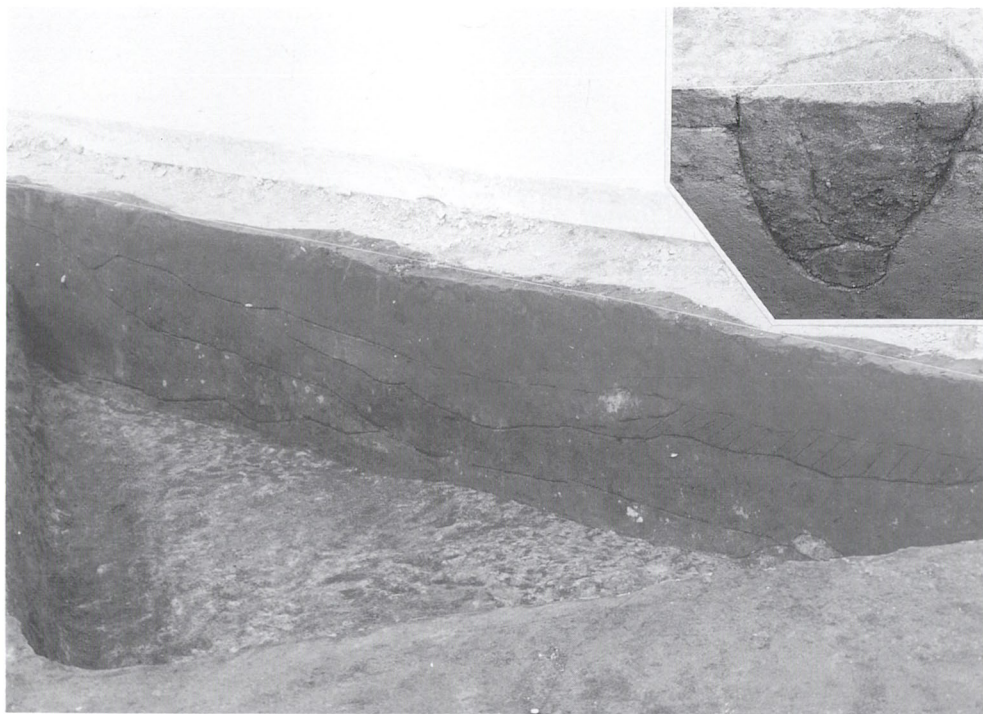
2 発掘調査の状況（第一二号住居址）〈北から〉



1 第七号住居址遺物出土状態〈東から〉



2 第七号住居址遺物出土状態〈北から〉



1 第八号住居址全景・柱穴断面〈西から〉



2 第九号住居址遺物出土状態〈北から〉



1 第九号住居址遺物出土状態〈西から〉



2 第九号住居址遺物出土状態



1 第一〇号住居址全景〈東から〉



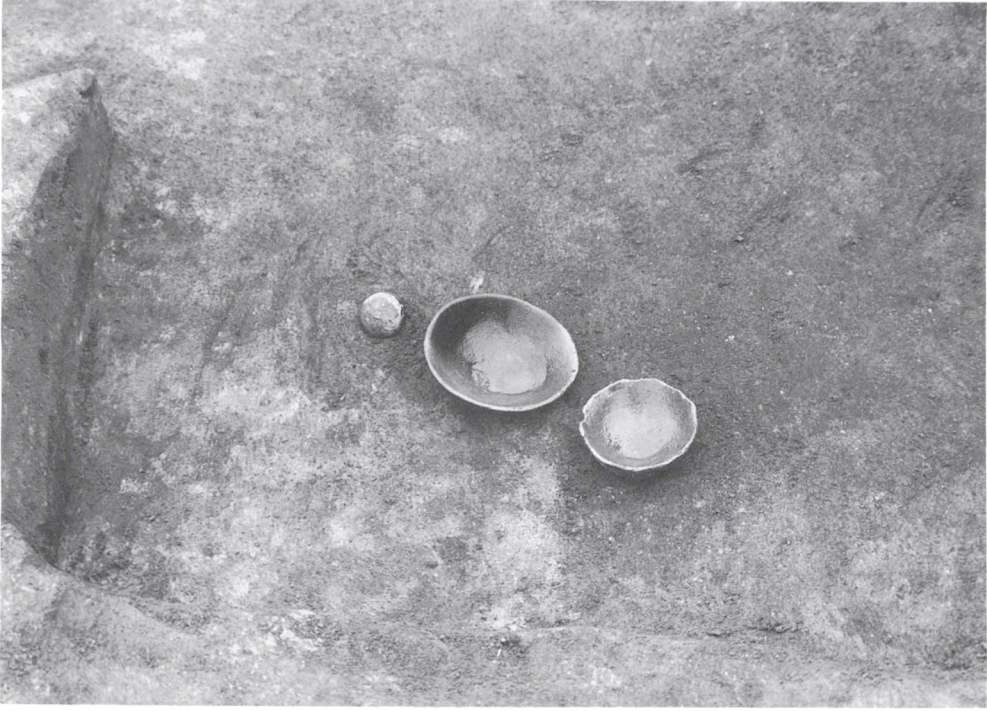
2 第一一号住居址遺物出土状態〈南から〉



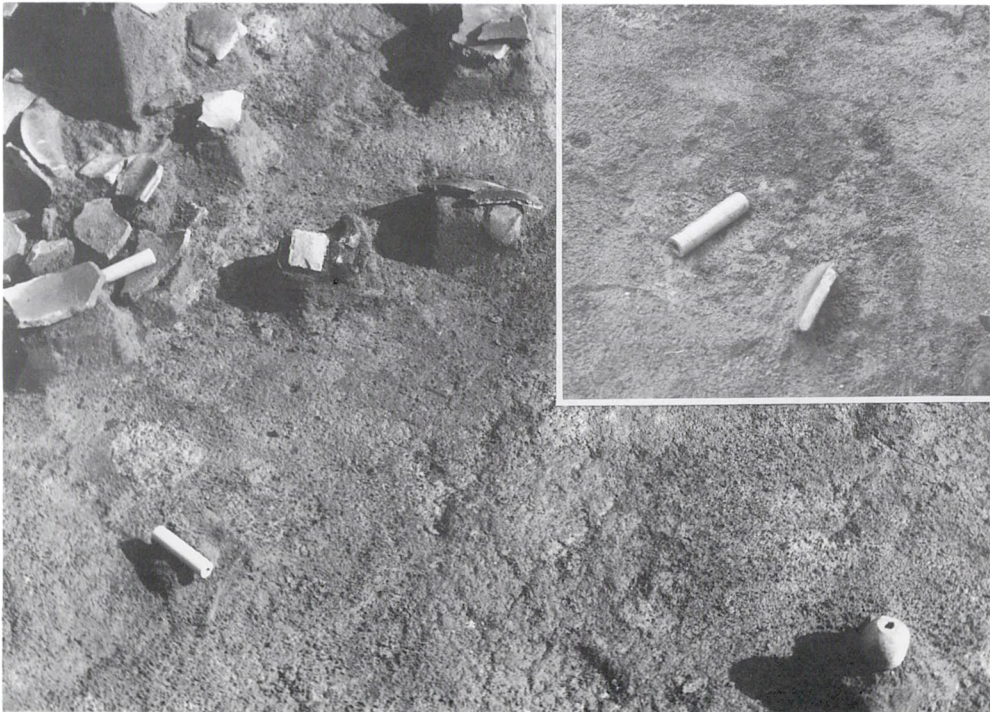
1 第一一号住居址炉址 (確認時)



2 第一一号住居址遺物出土状態〈東から〉



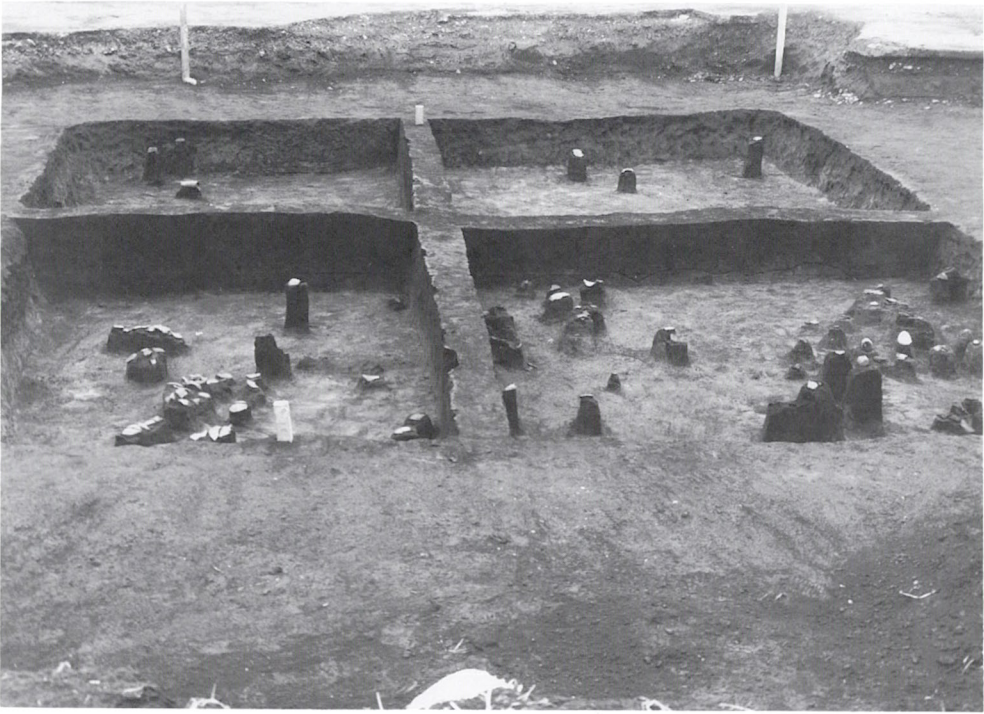
1 第一一号住居址遺物出土状態（土器）



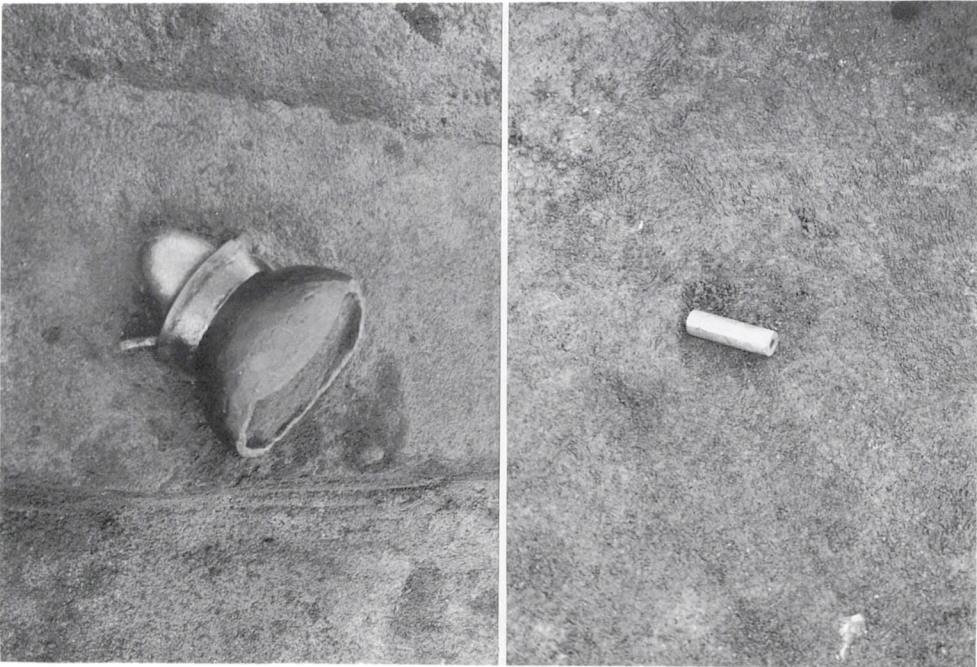
2 第一一号住居址遺物出土状態（管玉・球状土製品）



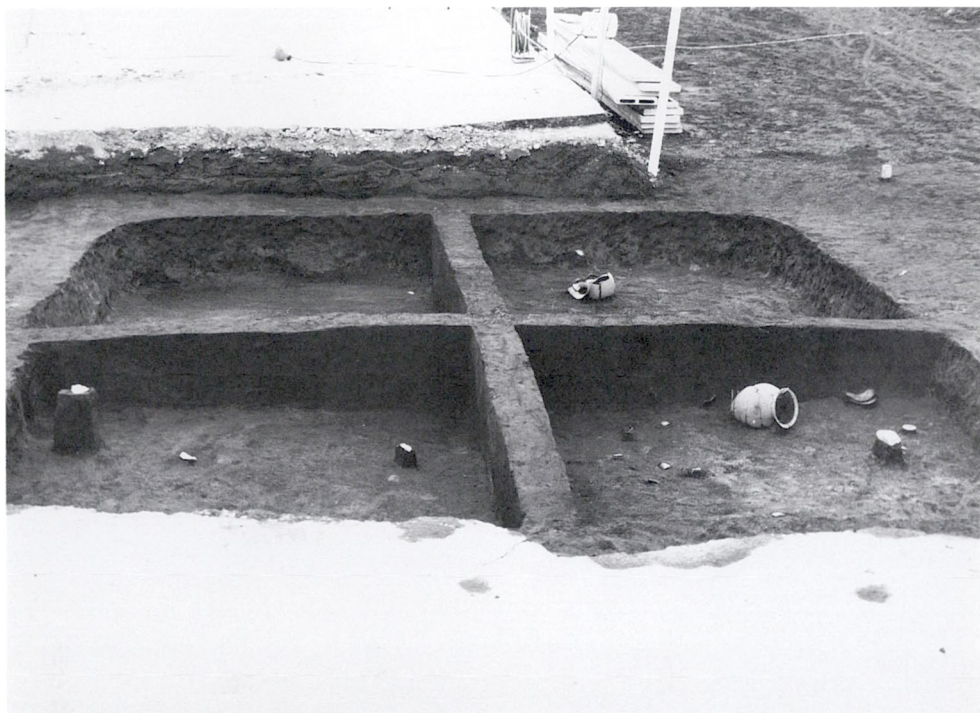
第一四号住居址全景〈南から〉



1 第一四号住居址遺物出土状態〈西から〉



2 第一四号住居址遺物出土状態（土器・管玉）



1 第一六号住居址遺物出土状態〈北から〉



2 第一六号住居址炉址断面



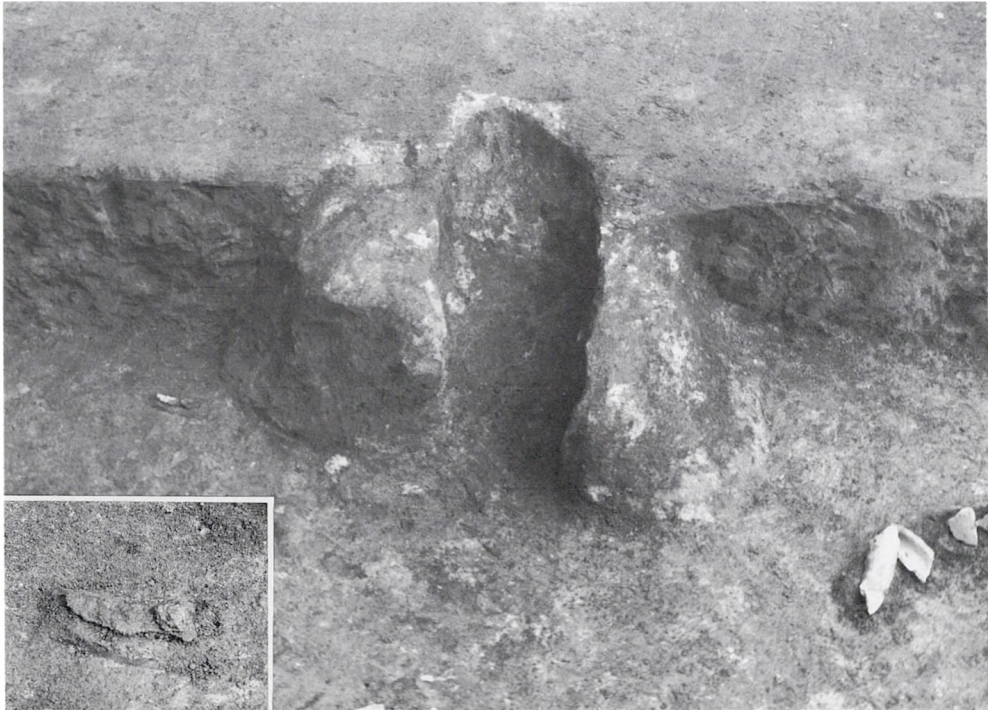
1 第一六号住居址遺物出土状態（土器）



2 第一六号住居址遺物出土状態（土器）



1 第六号住居址遺物出土状態〈北から〉



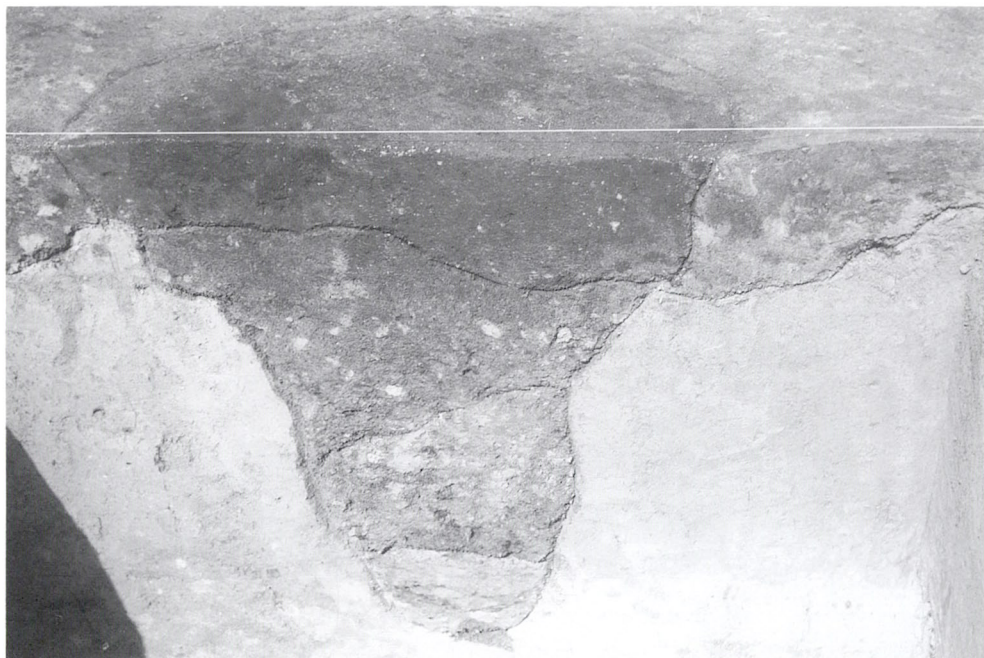
2 第六号住居址カマド・遺物出土状態（鉄鎌）



1 第一三号住居址遺物出土状態〈東から〉



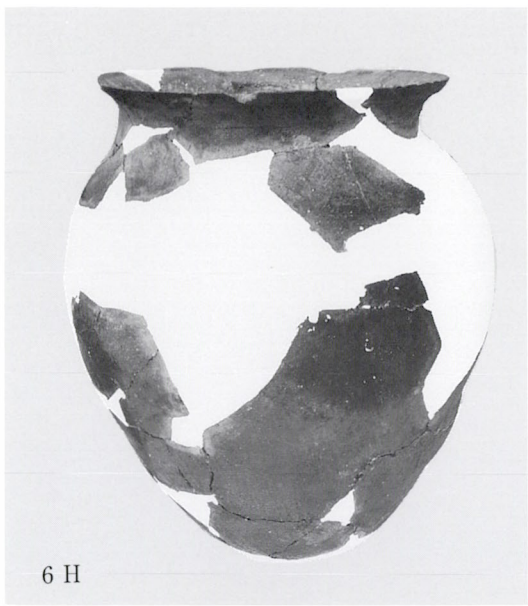
2 第一三号住居址遺物出土状態（土器）



1 第一三号住居址柱穴 (P₁) 断面



2 第一三号住居址柱穴 (P₂) 断面



第六・七・九号住居址出土遺物



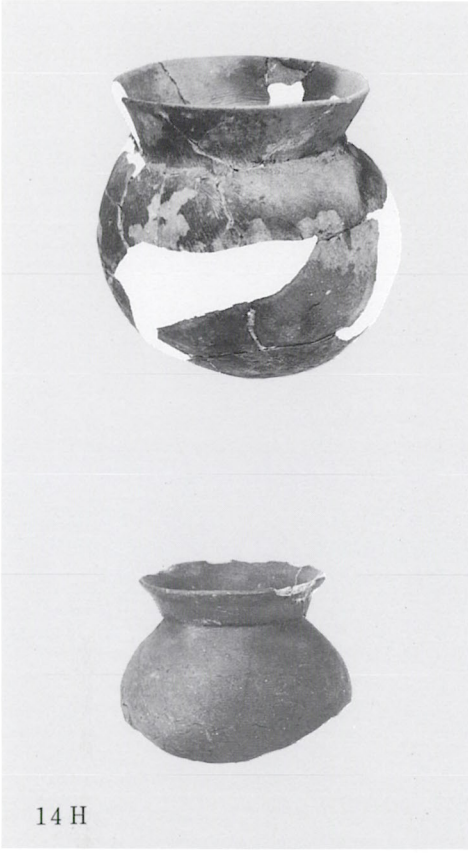
第九号住居址出土遺物



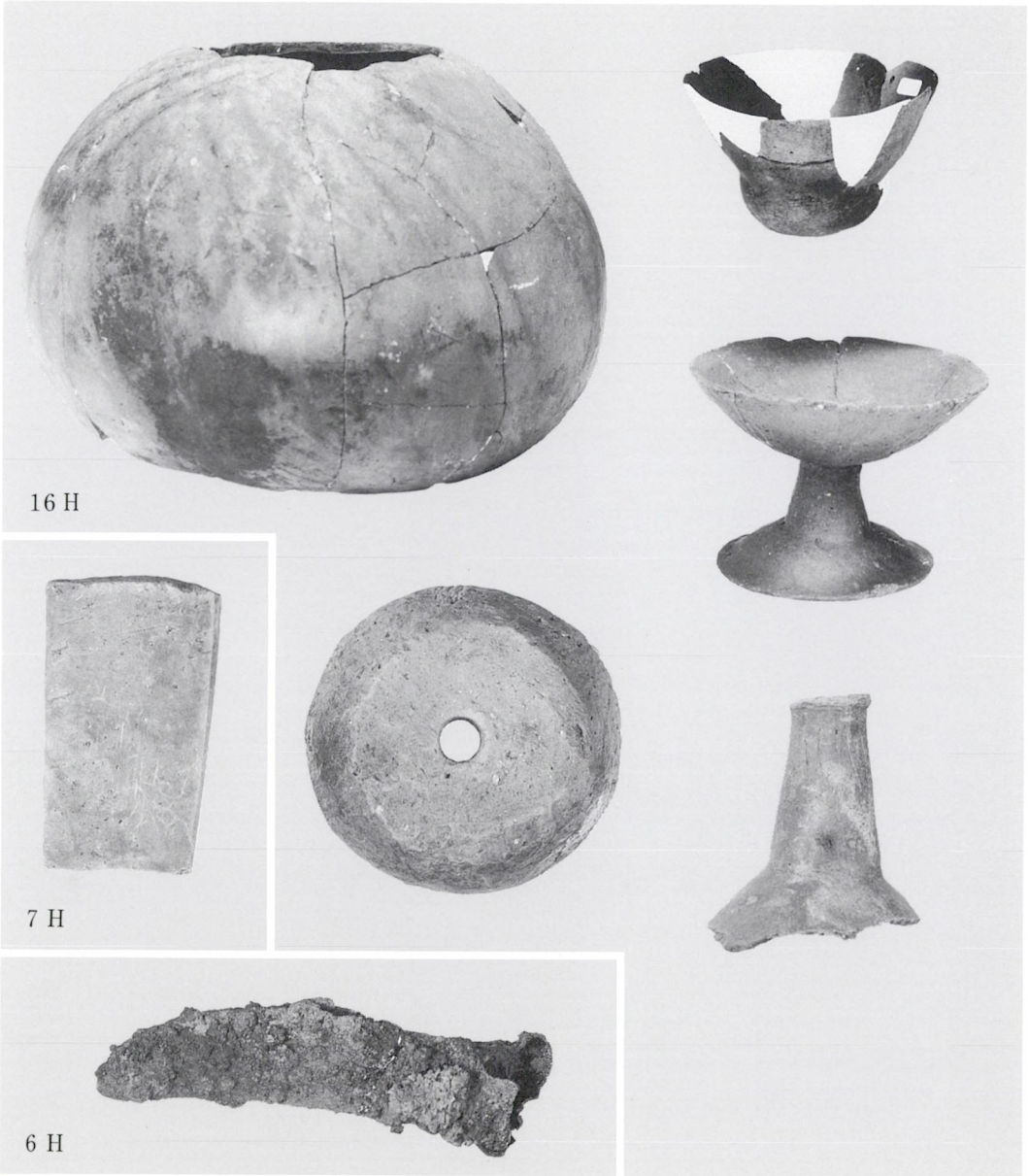
第一一号住居址出土遺物



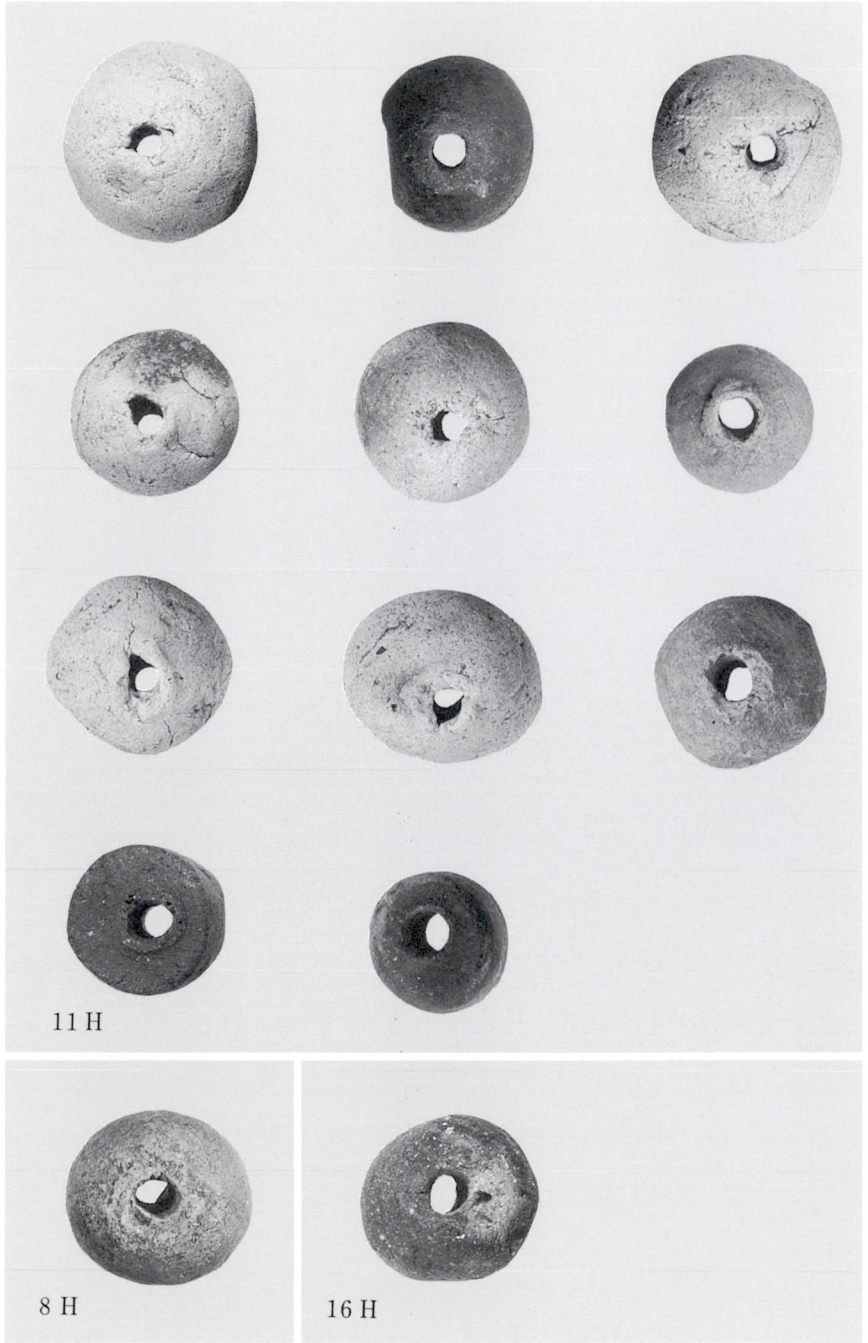
第一三号住居址出土遺物



第一四・一五・一六号住居址出土遺物



第六·七·一六号住居址出土遺物



第八・一一・一六号住居址出土遺物

発掘作業従事者

担当者 井上 義安（日本考古学協会員）
補佐員 江橋 和子 江幡 孝雄 川又 ともえ 五上 せつ
 部 よし子 鈴木 浩子 須藤 公子 飛田 信雄
 根本 あい子 山本 雅代 水戸市シルバー人材センター（3人）

報告書作成従事者（整理内容）・協力者

井上 義安（本文執筆・レイアウト）
鈴木 浩子（遺構図面整理・遺物実測トレース・写真図版・レイアウト）
飛田 信雄（土器接合復元）
江橋 和子（遺構図面整理・遺物実測トレース）
安 真奈美（遺構図面整理・遺物実測トレース）
石崎 幸恵（水洗注記・図面張付）
栗原 芳子（水洗注記）
石崎 洋子（水洗注記）
千葉 隆司（校正指導）

水戸市大串遺跡

発行 平成六年一〇月
編集 鈴木 浩子
印刷 ワタヒキ印刷株式会社
